

2. 史跡及び名勝笠置山発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、笠置町の依頼を受けて、史跡及び名勝笠置山指定地内に敷設する防災道路造成工事に先立って、当調査研究センターが実施した。

調査地は、京都府相楽郡笠置町大字笠置小字水晶谷・神宮山地内で、調査面積は640m²、調査期間は、平成19年4月23日～9月26日である。現地説明会は9月2日に実施し、170名の参加があった。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長小池寛・同係次席総括調査員伊野近富・同係調査員松尾史子が担当した。

調査に当たっては文化庁・京都府教育委員会・笠置町から数多くのご指導、ご助言を得た。笠置町が設置した調査委員会で、5月10日に調査地が決定され、8月21日に成果報告を行った。また、現地作業では、調査委員である同志社大学准教授鋤柄俊夫氏、奈良大学准教授千田嘉博氏、笠置町文化財審議委員小林慶範氏に指導をいただき、宗教法人笠置寺、地元南部区の方々のご理解とご支援をいただいた。

なお、今回の発掘調査に係る経費は、全額、笠置町が負担した。

2. 歴史的環境

史跡及び名勝笠置山は、京都府南東部の山間部にある。この山々に囲まれた中を木津川が東から西へ流れている。その川に南から半島状に突き出した山塊が笠置山である。標高は288mで、全山花崗岩で形作られている。

笠置山の地形は、北は木津川に面し、断崖絶壁となっている。西から南にかけては打滝川が、東には谷があり、笠置寺にとって自然の要害になっている。

笠置山の歴史は、考古学的には笠置寺の境内から出土した弥生時代の石剣が発見されているので、弥生時代から人跡をたどることができる。笠置山は7世紀末に寺が開創され、奈良時代には磨崖仏が作られたと伝えられている。現在、本堂の裏にふたつの磨崖仏があ



第1図 調査地位置図(1/40,000 国土地理院 奈良)

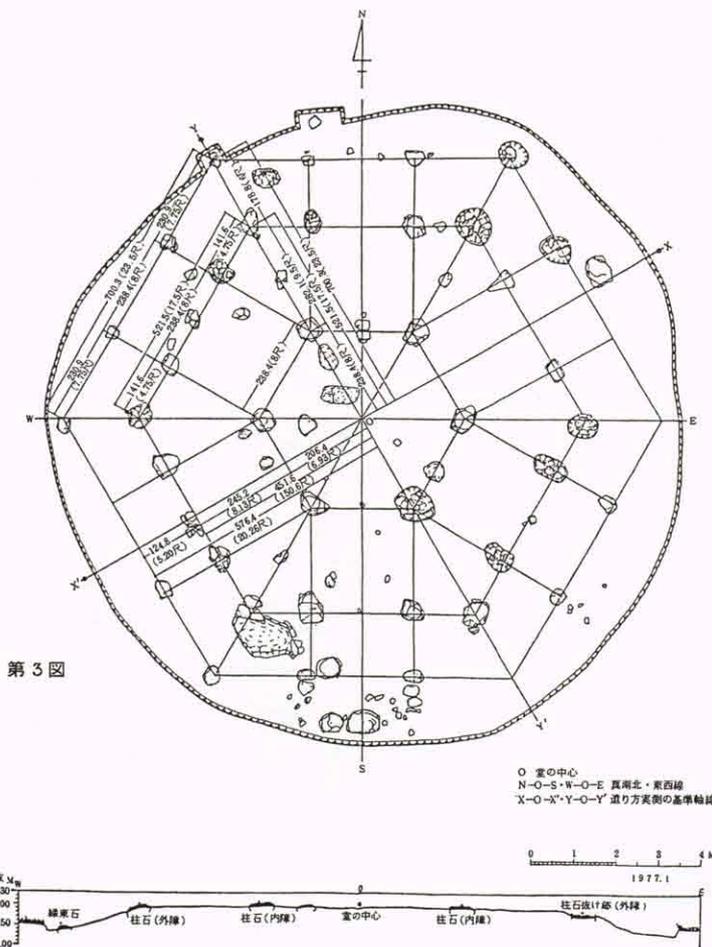
る。ひとつは弥勒石と呼ばれる弥勒大磨崖仏で現笠置寺本堂の横にある。後述する大火災で磨崖仏は崩落したが、光背部分がかろうじて残っている。ふたつ目は虚空蔵石(線刻菩薩磨崖仏)である。これは、虚空蔵菩薩である。像の高さは9mである。

文献学的には、『今昔物語』や『枕草子』をはじめ、貴族の日記にも笠置のことは記されている。それは、修験道の聖地として書かれた場合が多い。また、御堂関白藤原道長の参詣は有名である。前述した磨崖仏の下で、平安時代後期から鎌倉時代初期の経塚関係遺物が発見されている。

鎌倉時代初期には興福寺学僧貞慶が隠遁し、ここで、大般若経600巻を完成させ、納経するため、般若台に六角堂を建設した。鎌倉時代中期には東大寺僧宗性が入山し、ここで、多くの著作をした。その後、東大寺の末寺となっている。笠置寺が有名になったのは元弘の乱(1331年)である。元弘元年8月27日に鎌倉幕府の転覆を企てていた後醍醐天皇は、この計画が発覚したので、笠置寺に行幸し、本堂を行在所とした。その後、9月26日に鎌倉方の大軍が笠置を攻めたが、籠城軍は奮闘し、持ちこたえた。しかし、28日になって城の北側の絶壁をよじ登った鎌倉軍のため、籠城軍は総崩れとなり、後醍醐天皇は笠置を後にした。このとき、六角堂や千手堂、大湯屋以外の堂宇は炎上したという。

その後、本堂は永徳3年(1381)再建されたものの、応永5年(1398)に焼失したという。

戦国時代、笠置の地は南が大和の柳生に通じ、北は木津川に面することから軍事上の要衝であった。そのため、山城守護細川晴元のもと、守護代には木沢長政が補され、山城として使用されたい。『多聞院日記』天文10年(1541)11月26日条には、伊賀衆が攻め込んできて、戦となり、幾つかの建物が焼かれたことが記されている。この時期の笠置城の縄張りについては、中井均氏の研究がある。^(注1)



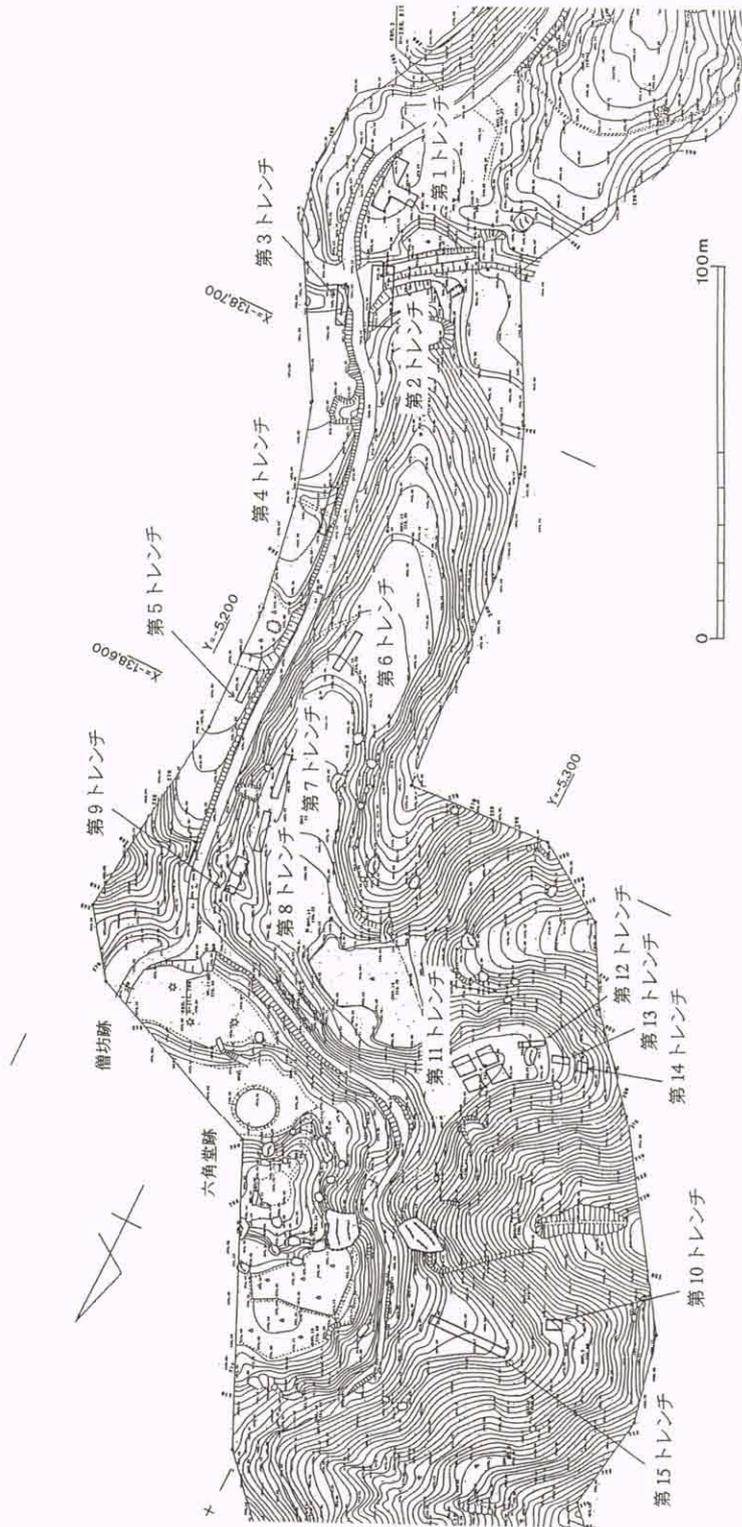
第2図 六角堂実測図

3. 調査概要

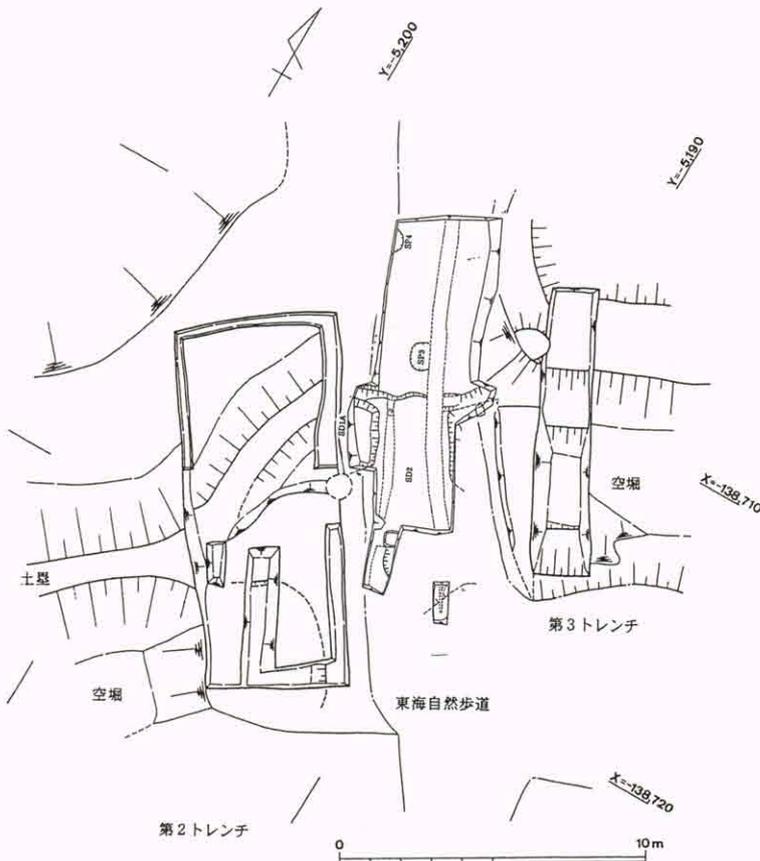
既往の調査

笠置山での発掘調査は、今回で3回目である。1回目は、六角堂を対象とした調査である。この調査で高さ0.5mの土壇の上に、六角形に並べられた礎石群が2重であることが確認された(第2図)。六角堂の大きさは中心部で13.8mあったと推察される。礎石は0.2~0.3mの小さな平石であった。出土遺物は平安時代後期~鎌倉時代初期の瓦などであった。『太平記』によれば、六角堂は焼けてはいないが、発掘調査の結果は、いつの頃かわからないが焼失した痕跡があった。六角堂跡は現在整備され、復元的に礎石が置かれている。

2回目の調査は、笠置寺への防災道路を建設する前に、史跡及び名勝地内の遺構・遺物の状態を把握しルートを考えるため実施した。六角堂の南側の谷部と尾根部に15か所のトレンチが設けられた(第3図)。調査地南部(第2・3トレンチ)では土塁と空堀を確認し、城



第3図 平成17年度トレンチ配置図

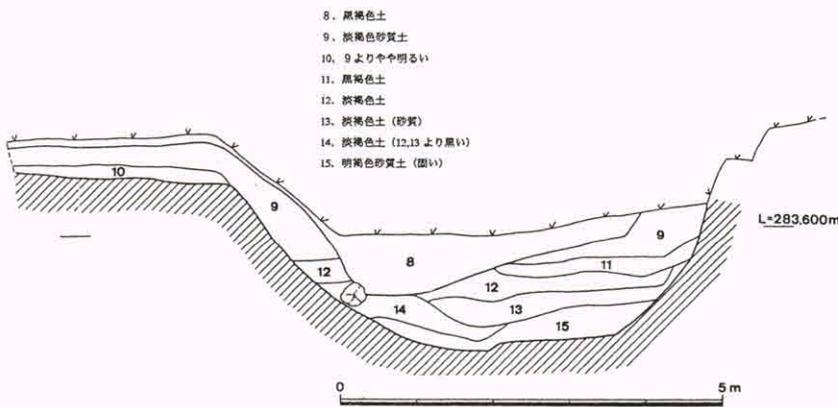


第4図 平成17年度第2・3トレンチ実測図

第2トレンチで宝篋印塔が出土したことから、周辺は中世に墓地であった可能性がある。9トレンチでは土塁と空堀が確認され、城の施設であることが確認された。時期は不明だが、調査地南部の土塁と空堀と一対とすれば鎌倉時代後期から南北朝期と戦国時代の2時期と考えられる。

調査地北西部では、やや広い尾根上(第11・15トレンチ)に建物があつたことが判明した。主丘陵には六角堂などの笠置寺の施設があり、今回確認された建物も寺に関連する可能性がある。

以上、山岳寺院である笠置寺に関連する施設が発見されたことは、山岳寺院の構造を考える上



第5図 平成17年度第3トレンチ土層断面図

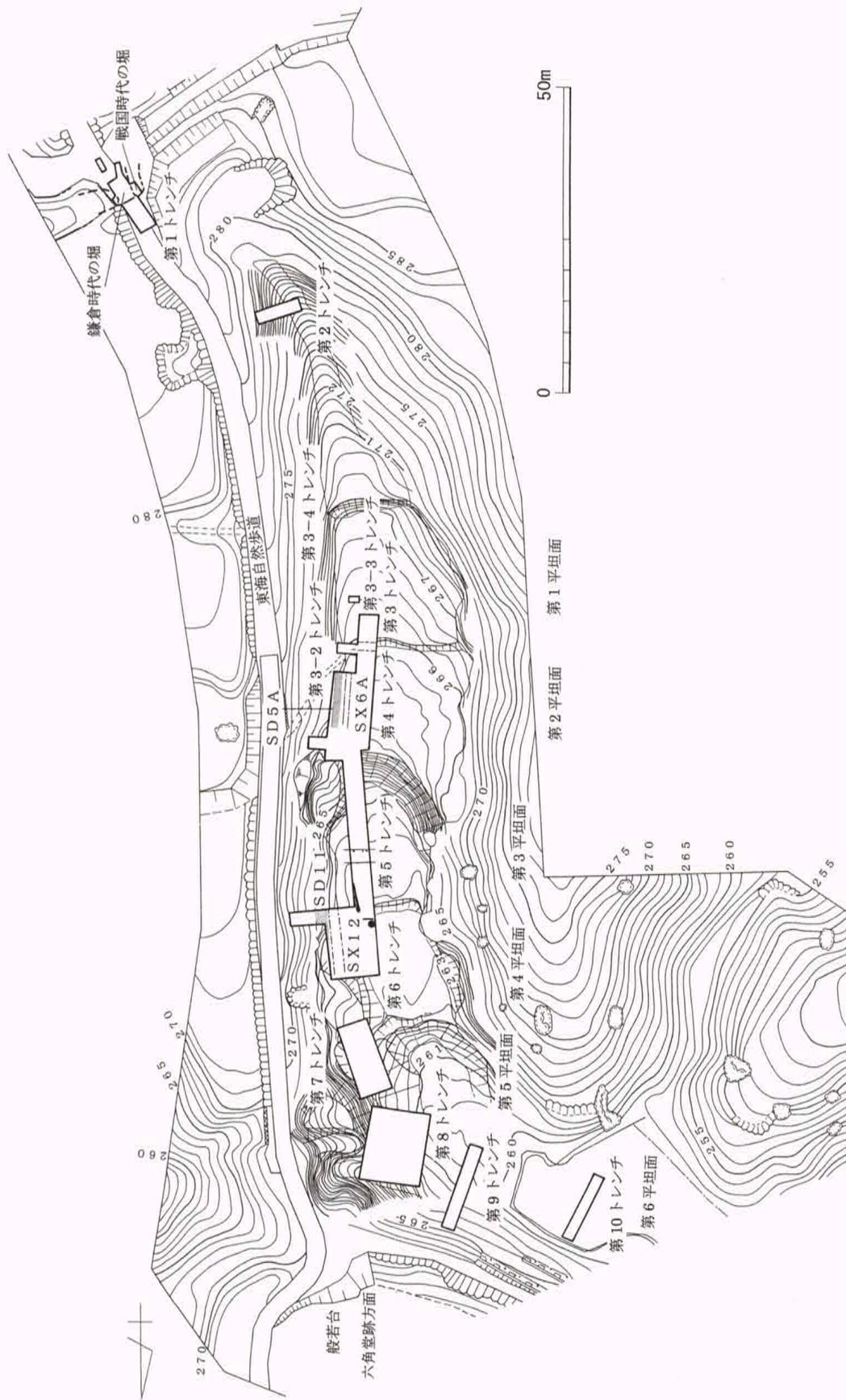
の施設であることが確認された。2時期あるようで、出土遺物が少なく、断定はできないが、鎌倉時代後期から南北朝期と戦国時代の所産と考えられる。鎌倉時代の堀は幅5m、深さ2mである(第5図)。

調査地中央部の調査の成果は、東海自然歩道より東側の平坦地(第4・5トレンチ)は中世の墓地と建物跡が存在したことが想定できる。同西側の谷部(第6・7トレンチ)は地山面で焼土が認められ、火災があつたことが判明した。出土遺物は鎌倉時代後期から南北朝期のものが多数を占める。8トレン

で貴重な資料となった。また、城に伴う土塁や空堀の存在も、城として機能した笠置山の歴史を知る上で貴重な資料となった。

今回の調査

調査地は現笠置寺の本堂や後醍醐天皇が行在所とした中世笠置寺の本堂



第6図 トレンチ配置図

のある場所から南に約300mの地点に位置している。中世笠置寺の主要な施設であった六角堂のすぐ南の谷部が調査対象で、調査前の状況はヒノキ林であった。谷は六角堂側から見ると「L」字形である。その谷の両側に丘陵があるが、前方では一つになっており、すなわち、逆「Y」字形となっている。

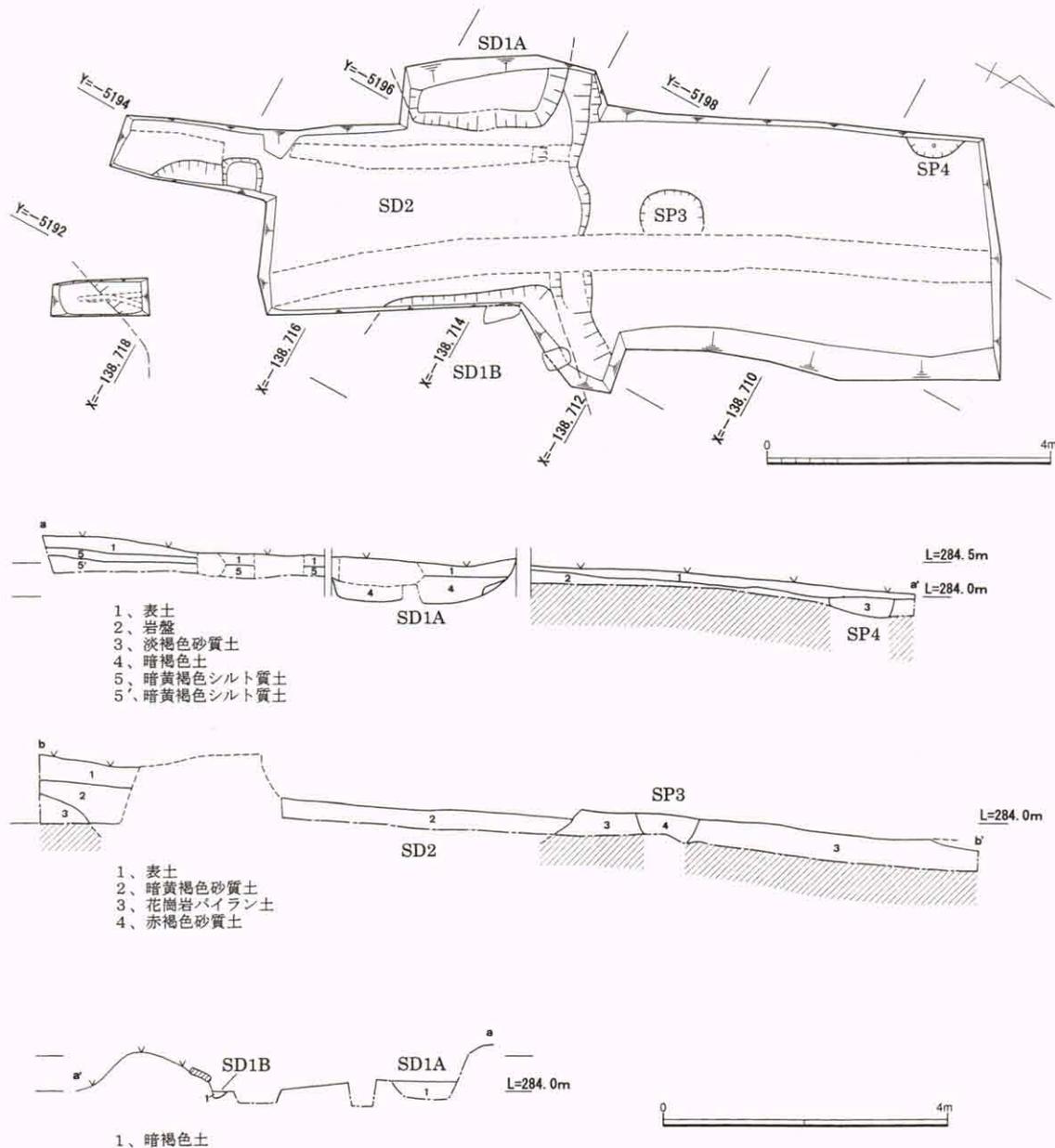
調査のためのトレンチは10か所設けた(第6図)。第1トレンチはふたつの丘陵がひとつになった地点に設定した。笠置城の虎口(こぐち)に当たる地点である。平成17年度調査の第2・3トレンチとの間に設定した(第3図参照)。ここは東海自然歩道である。第2～第10トレンチは幅10～20mの谷の平坦面と尾根に続く東斜面に設定した。トレンチ掘削前に25cmコンターで地形測量を行った。第6図は、1mコンターの全体図の中に調査地周辺の25cm等高線を合成したものである。表土掘削は重機で行い、その後は人力で掘削を行った。なお、調査地は保存されるので、完掘はしなかった。

第1トレンチ(第7図) 山城の虎口と推定される場所に配置した。トレンチは北西—南東方向が長い方形である。幅が3m、長さ10mである。トレンチの両側には土塁と空堀が遺存しており、東海自然歩道によってこれらの施設が途切れた地点が対象となった。前回の調査で戦国時代の堀と鎌倉時代の堀が確認されたが、虎口の中心部分は不明であった。今回はその部分にトレンチを入れた。

表土下0.2mで花崗岩の岩盤となった。遺構はこの岩盤を削って造られていた。トレンチ中央部やや南で東西方向の堀を2条確認した。埋め土は暗褐色土である。西側の堀SD1Aは幅2.2m以上、長さ0.7m以上、深さは0.3m以上である。平面形を確認するため、西側に0.8m拡張した。その結果、溝は台形である(東端2m、西端2.2m)ことと、端は斜めに傾斜していることが判明した。東側の堀SD1Bは幅2.5m、長さ1.2m以上、深さ0.5m以上である。最上層で寛永通宝1枚が出土したので、埋没時期は江戸時代初期以前には遡らない。平面形を確認するため、東側に拡張した。平面は台形であった。この2条の堀の間は、掘られておらず、幅2.3mの土橋であったと考えられる。今回の調査では、時期を確定する遺物は発見されていない。しかし、前回の調査でこの堀は戦国時代であることが確認されている。

戦国時代の堀の北端と重複して東西方向の堀SD2の北端が確認された。埋め土は暗黄褐色砂質土である。土色は南端まで変わらないので、まず、南西部を2.5m拡張した。しかし、ここでは確認できなかった。そこで、南東方向に小トレンチを設置したところ、暗黄褐色砂質土と地山との境が確認された。平面では北西から南東へ弧状を描いており、堀は南へ大きく屈曲していることが確認された。幅は6.7～7.2mである。前回の調査はこの東側を調査したが、そこでは、幅5.5m、深さ2.5mで、底は花崗岩の岩盤であったことが判明している。最下層で鎌倉時代末期の土師器皿が出土しており、時期は鎌倉時代と判断している。

トレンチを重機で埋め戻す際に、第1トレンチと前回の調査地との間を部分的に掘削したところ、戦国時代の堀SD1Aは、さらに西に40cm続いていることと、やや南へ屈曲していることが判明した。また、トレンチの南西隅の西隣の部分では、堀SD1Aと同様の平面台形で、埋



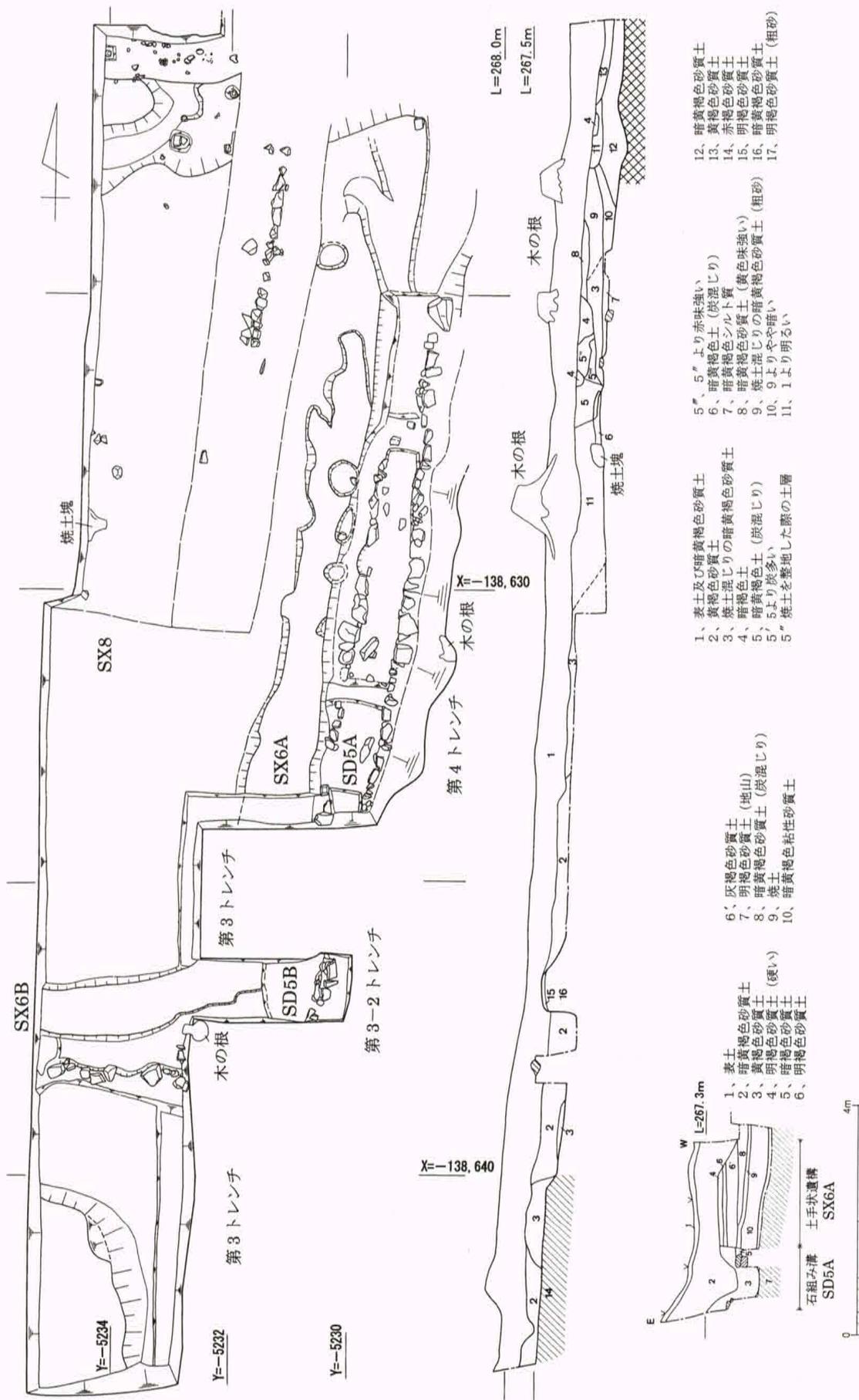
第7図 第1トレンチ実測図

め土も暗褐色の堀を確認した。幅は2.2m以上、長さ0.6m以上、深さは0.2mである。これは西側に現存する堀とつながると考えられる。そして、堀SD1Aは土塁の北側につながる可能性がある。また、鎌倉時代の堀は幅7.2m以上で続いていることが判明した。

トレンチ中央部で円形のピットSP3を確認した。直径0.9m、深さ0.3m以上である。埋め土は赤褐色砂質土である。

トレンチ中央にある現代溝によって東側は削平されていた。無遺物である。トレンチ北西部で円形のピットSP4を確認した。直径0.9m、深さ0.3m以上である。埋め土は淡褐色砂質土である。15世紀後半と16世紀前半の土師器皿が出土した。SP3とSP4は柱穴で、柵の一部であったと考えられる。

調査前の谷部は、幅10~20mで、長さ140mある。南部が狭く、北部が広い。標高は南が高く、



第8図 第3・4トレンチ実測図

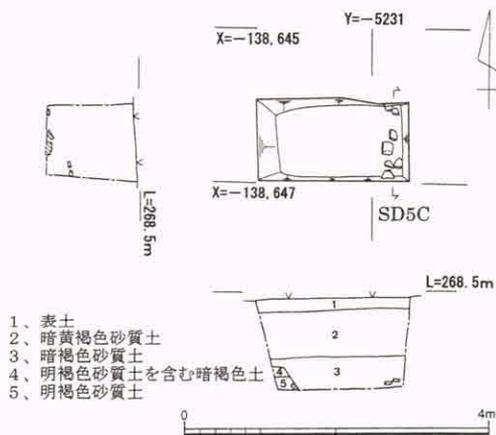
北部が低い。南から約20mは自然の緩傾斜地であるが、そこから5段の平坦面が階段状に形成されている。谷は北部で西に屈曲しているが、ここでも1段低くなっている。層序は調査前が山林であったため、表土は腐植土で、その下は花崗岩の風化土が厚く堆積していた。

第2トレンチ(図版第2) 調査地南部の谷の始まり部分に設定した。東西に長い方形で、幅2m、長さ8.6mである。東半分は斜面にかかっている。表土から約0.3m掘削したところ、東斜面はほぼ地山が検出された。谷の平坦面では1.2mで地山が検出された。表土下から地山まで淡褐色砂質土で、高所からの流土である。遺構はなく須恵器甕、信楽すり鉢、瓦質蓋、瓦器椀など14～16世紀の遺物が出土した。

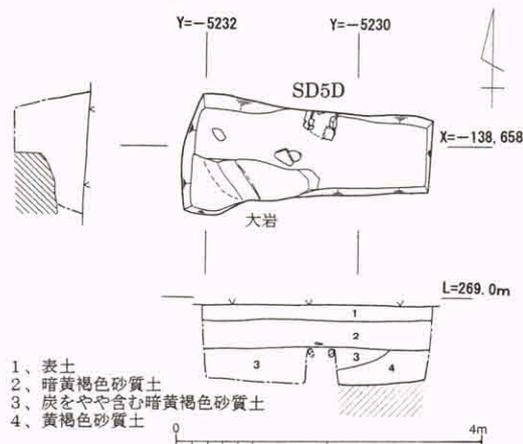
第3トレンチ(第8図) 谷部平坦面(第1平坦面)に設定した。このトレンチから第6トレンチまで連続している。南北に長い方形で、幅3m、長さ10mである。流土と考えられる暗黄褐色砂質土を除去したところ、北半部で東西方向に延びる土手状遺構S X 6 B(道か堀跡)を確認した。その部分のみ約0.3m高い。断面形はかまぼこ形である。地山とよく似た黄褐色砂質土で形成されている。南半部は方形の高まり(南北3.5m以上、東西1.5m以上、高さ0.3m)があり、トレンチ内で土壇S X 7の東北部を確認したと考えられる。東側の断ち割り部で焼土を確認した。深さ2mである。出土遺物は土師器皿、瓦器椀などで14～16世紀のものである。上層では数個の石が東西に置かれていたが、この層で17世紀の唐津皿が出土した。場所は土手状遺構S X 6 Bのすぐ南である。

第3-2トレンチ(第8図) 第4トレンチで確認した溝SD5Aの続きを調べるため、東側に南北1m、東西2.5mのトレンチを拡張した。その結果、小さく割られた花崗岩の石を積み上げた溝の東肩(溝SD5B)が確認された。下面は表土から1.5mで、そこまで、暗黄褐色砂質土が堆積していた。西肩の石積みは削平されていた。この溝に向かって第4トレンチで確認された土手状遺構S X 6 Bが続いていたが、接合部は削平されていた。

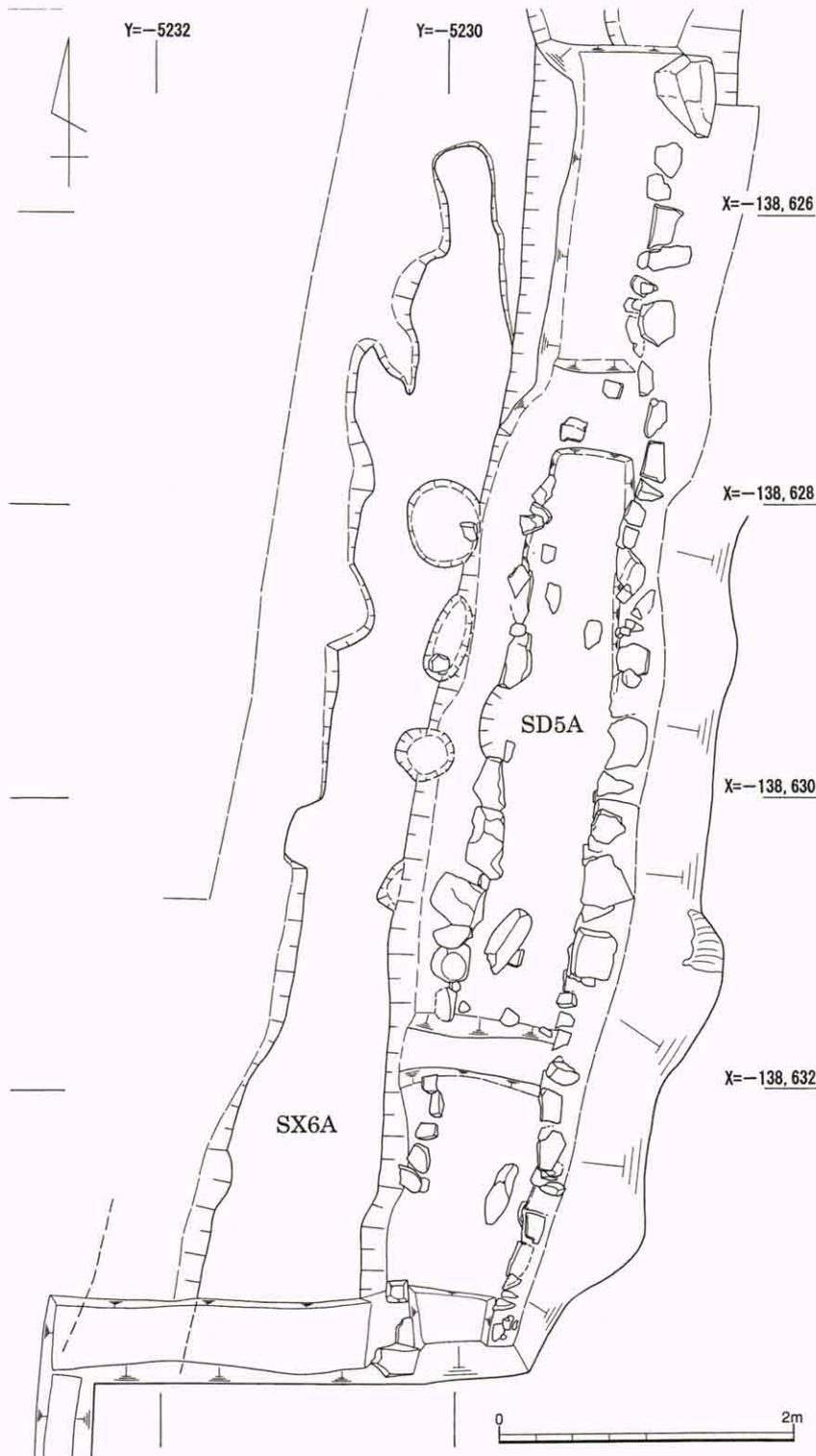
第3-3トレンチ(第9図) さらに南の第1平坦面にトレンチを設定して、溝SD5Aや溝SD5Bの続きを調べた。東西2m、南北1mの長方形である。その結果、深さ1.2mで溝SD5Cを確認した。層序は、表土下0.7mまで暗黄褐色砂質土で、それ以下が暗褐色砂質土である。



第9図 第3-3トレンチ実測図



第10図 第3-4トレンチ実測図



第11図 第4トレンチ東部実測図

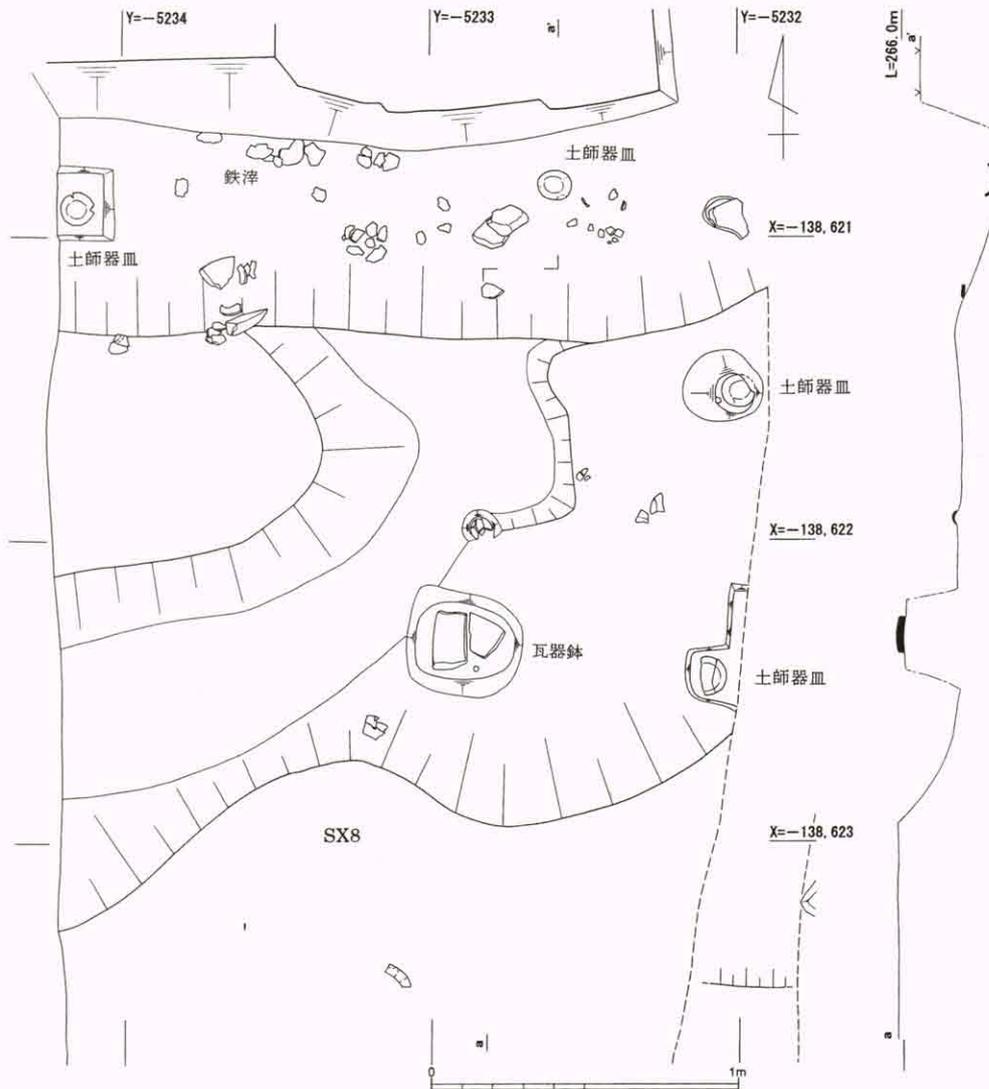
石積み溝はこの土層内で確認した。

第3-4トレンチ(第10図) 第1平坦面の南部まで、どのように溝が続いているのかを調べるため、トレンチを設定した。東西3.2m、南北1.5mの長方形である。その結果、深さ0.5mで数個の石を確認した。溝の東肩を形成していたかもしれない。また、トレンチ南西部で花崗岩の大岩を検出した。靴脱ぎ石様であるが、確証はない。

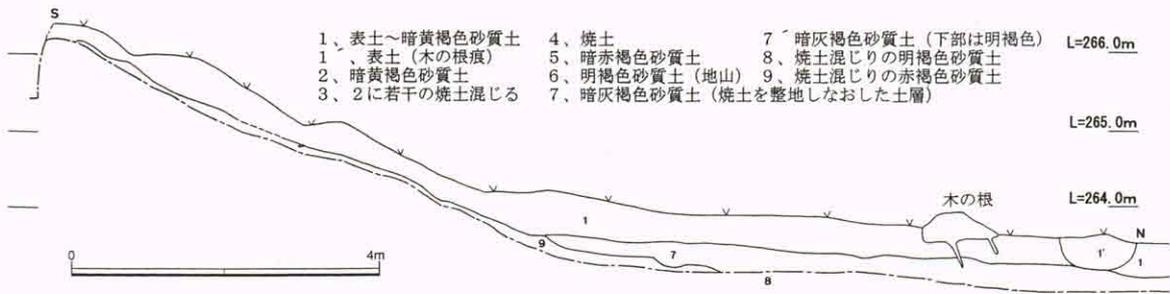
第4トレンチ(第8・11図) 谷部の第2平坦面に設定した。第3トレンチより幅が広く、東西17m、南北7mの長方形である。平成17年度調査第6トレンチを含む範囲に設定した。ここには、石畳状遺構あり、焼土に覆われている。この周辺に建物があるのではないかと想定して、トレンチを設定した。なお、東斜面にもトレンチを設定した。東西3.2m、南北2mである。

厚さ約0.4mの暗黄褐色砂質土を除去すると、室町時代の層に到達し

た。東斜面沿いで石積み遺構を確認した。平積みで、最高7段遺存している。並行してその西側にも石がある。石の平均的な大きさは0.2~0.3mで、厚さは0.1m以下である。長さ9m以上、幅0.7mの石積み溝SD5Aと考えられる。トレンチの東南部では石は比較的多く遺存していたが、北部は東側の石は遺存していたものの、西側の石はほとんどなかった。トレンチ南端から9mの地点に、一際大きい石(0.5m程度)が置かれており、石積み溝としてはここが最北端である。溝の西側にこれと並行する幅約1mの土手状遺構SX6Aがある。道か堀跡と考えられる。トレンチ南壁の土層観察によれば、溝SD5Aと土手状遺構SX6Aは焼土の上に形成されている。溝SD5Aの埋め土は黄褐色砂質土で、土手状遺構SX6Aは明褐色砂質土と暗黄褐色砂質土との互層であり、硬くたたき締められていた。土手状の高まりの中央ではやや黒く変色した所が数か所認められた。あるいは、垣根があったかもしれない。また、時期は特定できないが、土手状遺構SX6Aと重複してピットが4か所確認できた。溝をまたぐ施設であったかもしれない。溝SD5Aからは、滑石製石鍋や若干の瓦、土師器皿・土師器羽釜、東海系鉢、古瀬戸椀、常滑甕、中国龍泉窯青磁椀、砥石などが出土した。おおむね、13~15世紀のものである。



第12図 第4トレンチ北西部実測図

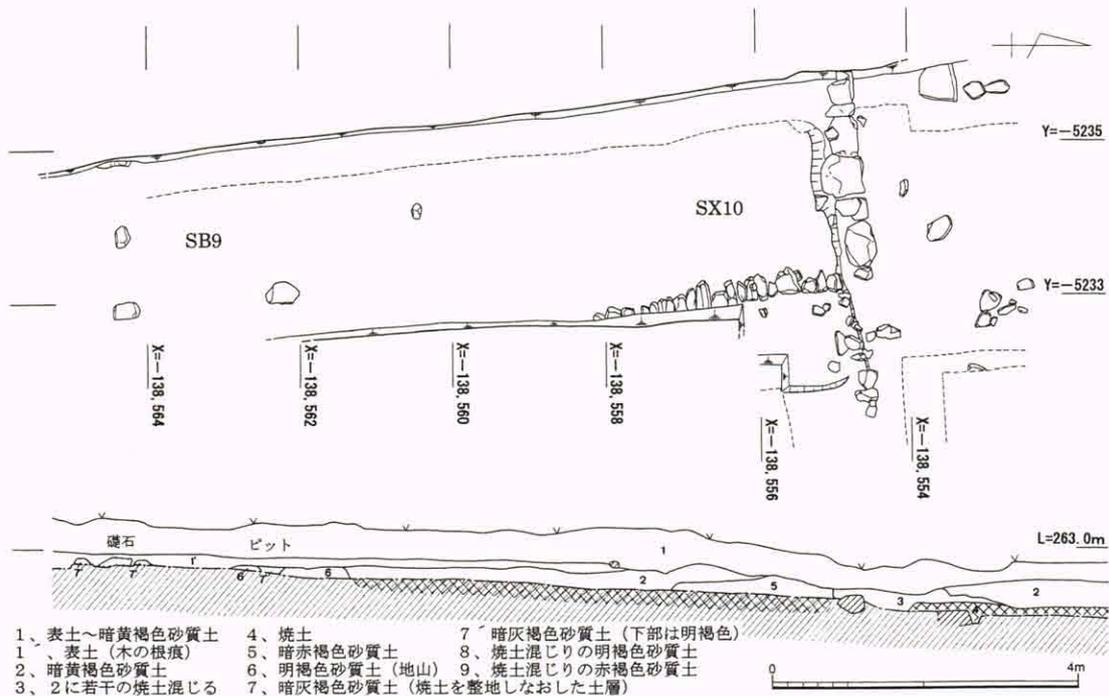


第13図 第5トレンチ土層断面図

この面での遺構が希薄であったトレンチの北西部のみ下層の調査を実施した。上場の遺構の下には焼土層が認められた。厚さは約0.4mで、前回の調査で検出された石畳状遺構はこれに覆われていた。焼土層下面まで掘削した。すなわち、焼けた時点の地表面である。南半部で土壇状の平坦面S X 8が確認された。北半部は徐々に傾斜している。平坦面S X 8南半部では焼けた壁土が目立つのみで、他の遺物はあまり出土しなかったが、平坦面S X 8北半部では多数の遺物が出土した(第12図参照)。種類は土師器皿・土師器羽釜、瓦器椀・瓦器火鉢、壁土、鉄釘、鉄滓などである。特に、鉄滓はトレンチ北端で集中して出土した。この付近に鍛冶工房が存在したと考えられる。これらは14世紀のものである。

東斜面は丘陵部からの流土のみで、人工的な施設はなかった。

第5トレンチ(第13・14図) 第3・4トレンチより一段下がった平坦面(第2平坦面)と第4トレンチまでの傾斜面に設定した。東西2.8m、南北23.4mの長方形である。南は第4トレンチと、北は第6トレンチと接している。傾斜面の層序は、表土下0.4mが腐植土と暗黄褐色土で、その下0.1mは焼土混じりの赤褐色砂質土であった。平坦面になると表土下0.4mが腐植土と暗褐色土



第14図 第5・6トレンチ実測図

で、その下0.4mは暗黄褐色土、さらに下0.1mは焼土混じりの赤褐色砂質土であった。これが、遺構のベース面となっている。

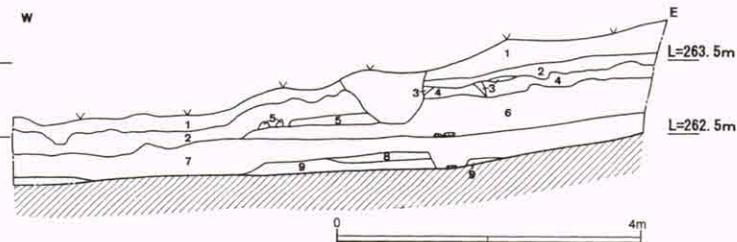
南部には遺構はなかったが、出土遺物は多かった。土師器皿・土師器羽釜、須恵器こね鉢などで、調理に関係する製品が多い。おそらく、第3平坦面側から転落したものであろう。

北部はトレンチ中央部で4個の礎石(0.2~0.3m大の平石)を確認した。東西方向に3石並んでいた。西端の1石はトレンチ西壁にかかっている。礎石間は1.1mである。東端の1石から北へ2.2mの地点にさらに1石あった。ここから2.2m西のトレンチ西壁にはピットがあり、したがって、「口」字状に礎石およびピットを確認したことになる。南北1間、東西2間以上の建物S B 9がこの地点に想定できる。また、この下層で焼土層を確認した。焼土層は北半分に集中している。特に、礎石建物の北側が赤く変色していた。この層の上に第6トレンチへ続く石列がある。石の面は東を向いている。このことから、トレンチ側である西側に土壇S X 10が想定できる。石は花崗岩を長方形に小割りにしたものがほとんどで、若干川原石が混じっている。火を受けて表面が荒れている石が多い。このトレンチでの出土遺物は土師器皿、瓦器椀・瓦器火鉢、鉄釘、棒状青銅製品、壁土、緑釉皿(口縁部にヘラにより刻みを入れる)などがある。

第6トレンチ(第14図) 第4トレンチより一段下がった第4平坦面に設置した。第5トレンチより幅が広く、東西8.5m、南北13.5mの長方形である。東斜面には東西2.6m、南北4~4.4mの拡張トレンチを設定した。西側が広い台形である。調査前の地形観察によればトレンチの東端3mは0.4mほど高い地形で、そこに、平石が十数個あり。東斜面の下端では多数の遺物が出土した。東の丘陵から落ちた転落したものと考えられる。トレンチ東北部は表土から0.6mまで下げた段階で掘削を止めた。また、南西部は焼土層を覆う室町時代~戦国時代相当層で止めた。西部は焼土層が見えた段階で止めた。地山はさらに0.1~0.2m下である。地山はトレンチ北西隅では表土下1mで検出された。トレンチの中央部は平成17年度調査第7トレンチと重なる。前回調査で焼土層が確認されたので、この周辺に建物があるかどうか調べるため、トレンチを設けた。

今回のトレンチの土層観察によれば、元弘の乱(1331年)に伴う焼土層を整地した上に、厚さ0.1mの黄褐色砂質土層や赤褐色砂質土層で覆う。これが、室町時代~戦国時代相当層である。トレンチ西南部では0.3~0.4m大の平石を東西方向に据えているのが1列確認された。これは、焼土で覆われている。この石列は第5トレンチで検出された石列(土壇S X 10東石列)とは、焼土の上下で検出されたが、これらによって土壇S X 10が形成されており、土壇の外周は約0.1m低い。今回、下層の調査はしな

かったが、土壇S X 10東石列は同じ場所で改修されたと考えられる。したがって、土壇S X 10古段階は、焼土が形成された元弘の乱(1331年)の時点で機能しており、この土壇に建物があった



- | | | |
|-------------------|----------------|-----------------|
| 1、表土(腐植土) 下半は黄褐色; | 4、暗黄褐色砂質土 | 7、暗黄褐色砂質土 |
| 2、旧表土(腐植土) | 5、黄褐色砂質土(明るい色) | 8、焼土(黄褐色砂質土・硬い) |
| 3、木の根による暗褐色土 | 6、暗褐色砂質土 | 9、焼土(黒灰褐色) |

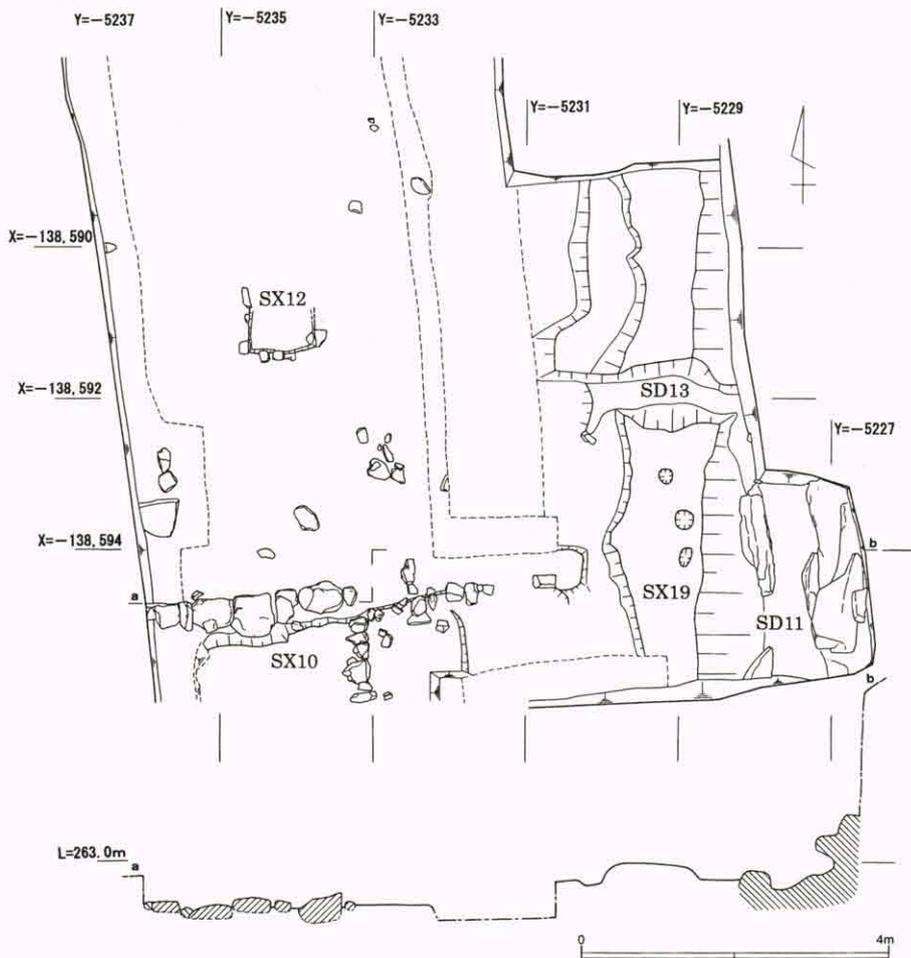
第15図 第6トレンチ土層断面図

ことが想定できる。土壇S X10新段階は、建物が元弘の乱で灰燼に帰した後に、復興されたものである。第5トレンチで検出したS B 9は、その一部かもしれない。

土壇S X10の北端を限る石列(土壇S X10北石列)は、さらに東へ続いている。ただし、石はひと回り小さく、風化も激しい。後で説明する土手状遺構S X19のところで収束している。さて、土壇S X10はトレンチ西方にも続いているが、トレンチ西壁に沿って、その北側に0.6m大の平石があった。礎石の一部とも考えられるが、対応する礎石は見つからなかった。

トレンチ北西部は焼土層上面で調査を止めたが、その面で「コ」の字形に石を配置した遺構S X12を確認した。北辺はない。炉の跡とも考えられるが、下層の焼土層と火床との区別はつかなかった。土壇S X10北石列からトレンチ北西部にかけての焼土層上面から土師器皿・土師器羽釜・瓦器椀・瓦器火鉢、信楽鉢、古瀬戸片口鉢、高麗青磁椀、中国龍泉窯青磁椀・白磁壺・白磁皿・青白磁小壺、砥石、石鍋などである。13~14世紀のものが多い。

トレンチ東南部は、土壇S X10北石列の東延長部が途切れたところで、土手状遺構S X19がある。東西0.9m、南北7m以上で、断面はかまぼこ形である。第4トレンチの土手状遺構S X 6 Aと同じく焼土層の上に築かれている。中央部で土手状遺構を分断する形に溝S D13がある。最大幅1m、深さ0.1~0.2mの素掘り溝である。埋め土は暗黄褐色砂質土である。



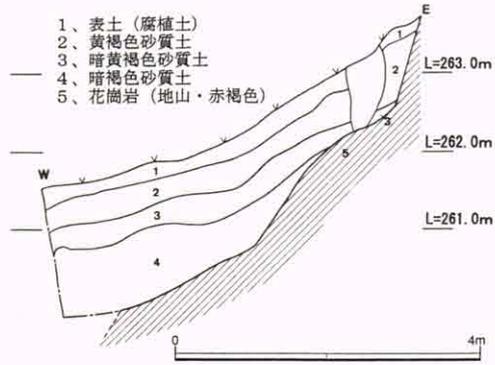
第16図 第6トレンチ南部実測図

トレンチ東端で土手状遺構 S X19と並行した溝 S D11を検出した。トレンチ東拡張部でその幅が確認された。その部分は花崗岩の大岩(幅1.5m、高さ1m)があったため、岩を弧状に削り溝を作ったと考えられる。幅(東西)は0.5m、長さ(南北)は拡張部分では2.8m、最長7mである。この周辺は、東側の丘陵から多くの遺物が暗黄褐色砂質土に覆われ埋没していた。出土遺物は、焼けて歪んだ青銅製椀(六器)、棒状青銅製品、火にあぶられ表面が荒れた中国龍泉窯青磁香炉、瓦器火鉢、土師器皿などである。13~15世紀のものが多い。

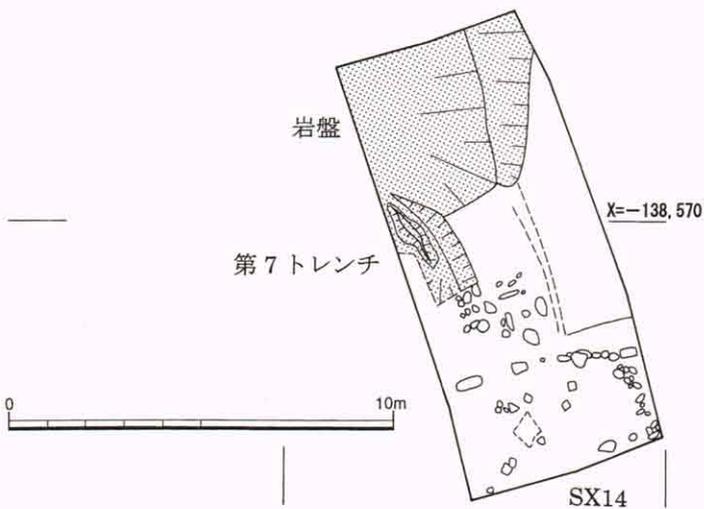
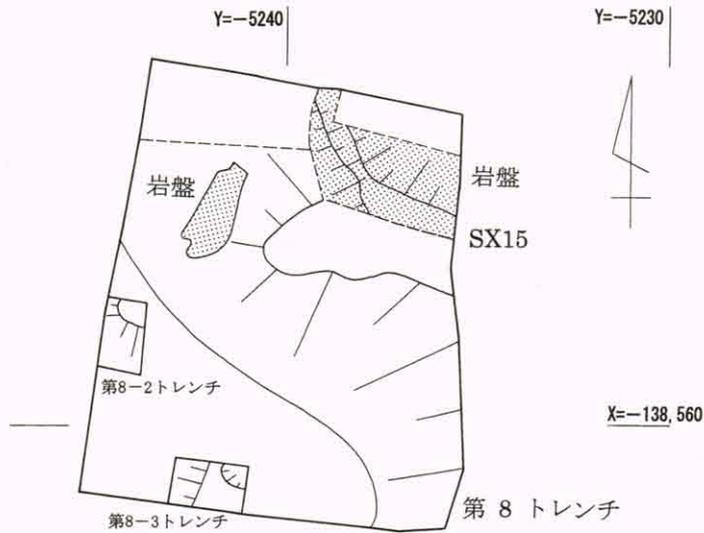
第7トレンチ(第18図) 谷部東斜面沿いの緩傾斜地から第5平坦面に設定した。東西5m、南北12mの長方形である。平成17年度調査第8トレンチを含む範囲に設定した。ここでは宝篋印塔が出土した東西方向の石列がある。今回の調査で、次のことが判明した。この石列から西北方向は自然地形の急斜面で低くなっているが、トレンチ西北部は地山を「L」字形にカットしている。地表面では観察できない平坦面が、東北方向に広がっていたと考えられる。西北隅は地表下1.8mでも花崗岩バイラン土(暗黄褐色砂質土層)であった。東北隅は1.2mで花崗岩の岩盤である。この岩盤は東北方向に向かって高くなっている。第18図には岩盤が露出した部分に網かけを施している。西北部の下層から土師器皿(16世紀)が出土したので、この平坦面は戦国時代には使用されていたと考えられる。

南東部は東西方向に2mの石列がある。ここから北西方向に傾斜しており、土壇 S X14を形成している。土壇の北辺は石列(石の大きさは0.2~0.3m)で区画されている。石はさらに西に続い

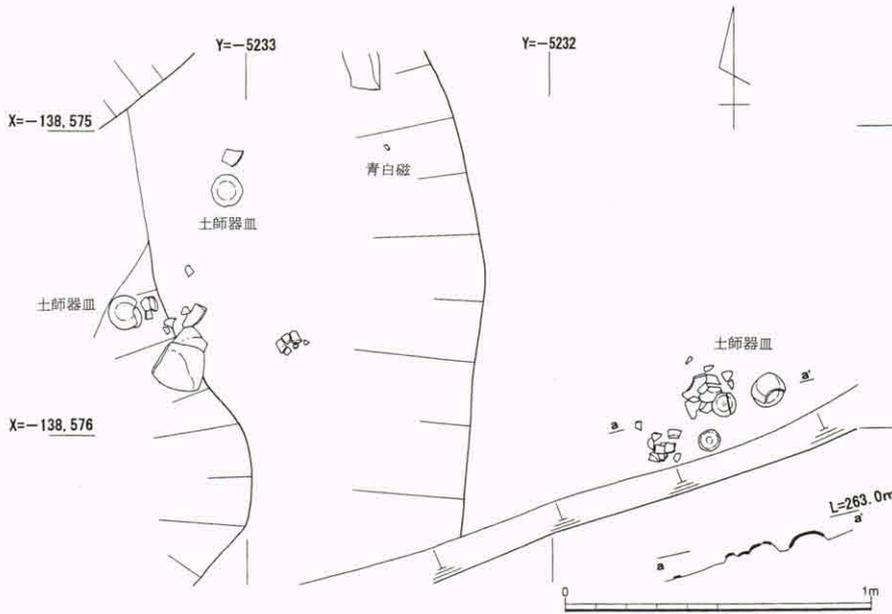
南東部は東西方向に2mの石列がある。ここから北西方向に傾斜しており、土壇 S X14を形成している。土壇の北辺は石列(石の大きさは0.2~0.3m)で区画されている。石はさらに西に続い



第17図 第7トレンチ土層断面図



第18図 第7・8トレンチ実測図



第19図 第7トレンチ南部遺物出土状況図

ていたがまばらで、石の大きさも大きくなり(0.3~0.5m)、同時期のものとは判断できない。暗褐色砂質土層によって造成された土壇は西南方向に広がっていて、トレンチ南壁では2.5mに広がっている。地山は地表下1.38m、標高261.62m

で検出された。南壁に沿って土師器皿が多量に埋没していた。完形品に近いものが多い。第4・6トレンチの焼土層から出土したものに比べると、白土器は灰色味を帯びていることと、やや器壁が薄いので新しい傾向を示している。14世紀中葉~後葉であろう。土壇の西側傾斜面では、完形品に近い白土器や赤土器が点在していた。また、小さな破片であるが、青白磁壺の把手があった。

第8トレンチ(第18図) 谷の屈曲部に設定した。前回の調査で丘陵を東西方向に切断していることが判明した。これによって土塁とその南北に堀が作られたこととなる。しかし、土塁とすれば東西30mのうち、西部の10mは急激に傾斜しており、防御面から問題がないではない。そこで、このか所に道があったことも想定できることから、平成17年度調査9トレンチの下方、土塁が急激に傾斜する位置にトレンチを設定した。地表面から0.2mほど掘削した。土塁の下方には花崗岩の岩盤があり、現状の土塁の形はこの岩盤によって形成されていることが判明した。上方は盛り土である。数点の土師器皿が出土したものの土塁の築造時期は不明である。

土塁北側の堀は、今回は0.5mほどしか調査していない。前回の調査では土塁の頂点から堀底までは2m以上下がるということが判明している。土塁は暗黄褐色土(花崗岩バイラン土)で0.5m以上盛り土されていた。今回の調査地点は土塁が急激に傾斜する地点であったが、基本的には西側は岩盤のままである。また、北側は岩盤を削って土塁の北側斜面を形成していたことが判明した。第17図には岩盤が露出した部分に網かけを施している。土塁の頂部から西方向および西南方向に裾広がりにより下降して、平坦面に至る。

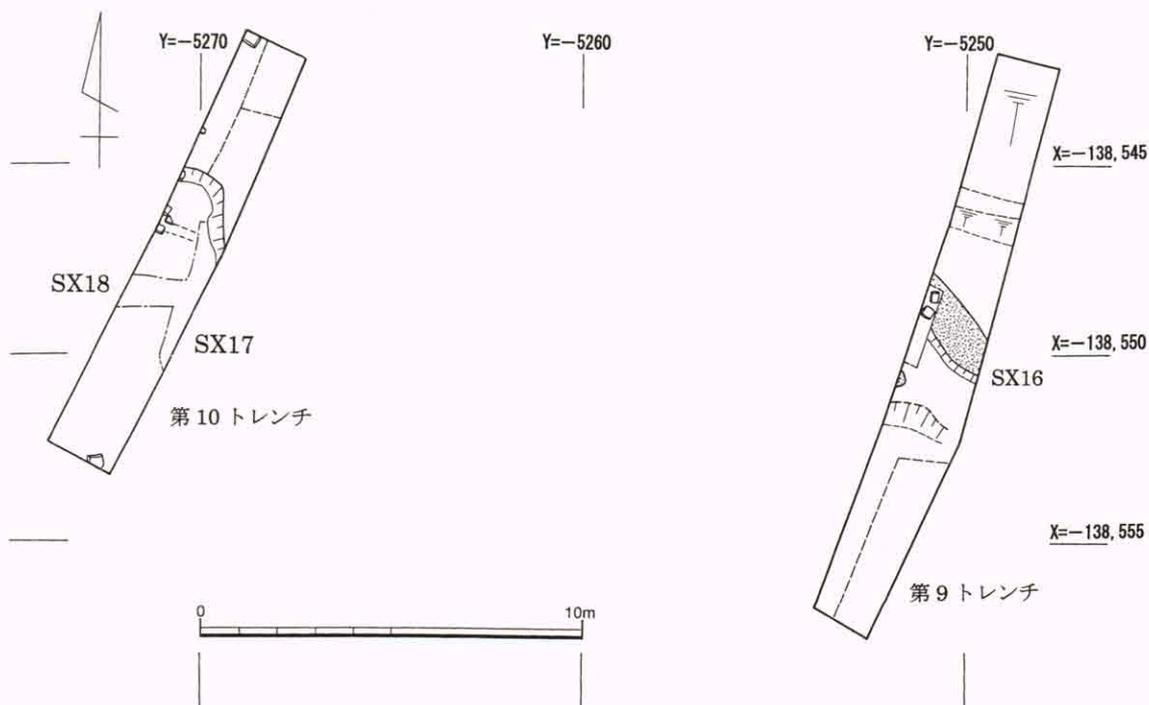
第8-2トレンチ(第18図) 地山の深さを調べるため、トレンチ西壁に沿ってトレンチを設定した。東西1m、南北1.8mの長方形である。1m以上掘ったが、水が湧いてきたため掘削は終了した。

第8-3トレンチ(第18図) 地山までの深さを調べるため、トレンチ南壁に沿ってトレンチを

設定した。東西2m、南北1mの長方形である。深さ1.55mで焼土面となった。西端で楕円形の平石を確認した。礎石建物の一部であった可能性がある。この焼土層は、元弘の乱に伴う。おそらく、第7トレンチで確認できた埋没した平坦面と同じ面がこの辺りにあったと考えられる。

第9トレンチ(第20図) 六角堂がある丘陵から谷への斜面から、谷の中の第5平坦面までに設定したトレンチである。谷が西側へ屈曲した地点に位置する。東西1.7m、南北12mの長方形である。谷の斜面から14世紀前半の土師器皿1点出土した。平坦面には木の株が多数あり、その間にある遺構面を確認した。暗黄褐色土を1mほど下げたところ、中央よりやや北で焼土層を検出した。第20図に網掛けをして示したところである。他の地点とは相違し0.1m以下の薄いものである。元弘の乱に相当するとも思われたが、炭層だけで、ほかとは様相が違っていた。埋め戻し段階でさらに断ち割ったところ、地表下1.6m(標高259.15m)で焼土層を確認した。また、トレンチ西南隅での断ち割りでも地表下1.4m(標高259.85m)で、焼土面を確認した。さらに西端では東西方向の石組み溝を確認した。溝は内法30cmで、平石を小口積みになっていた。以上の2か所で確認した焼土面こそが元弘の乱の時期と考えられる。暗黄褐色砂質土から銭貨、中国龍泉窯青磁碗、中国褐釉壺が出土した。

第10トレンチ(第21図) 谷が西へ屈曲した第6平坦面に設定した。東西1.7m、南北15.5mの長方形である。これより西側には平坦面はなく、自然の山の斜面となる。旧ゲートボール場であり、現代の造成による平坦面の可能性もあった。地表面から0.2mほどは非常に硬く、造成されたことを窺わせた。0.5mほど掘り下げたところ、中央部で西面する石積み遺構を確認した。南北方向に3.5m分続く。石は第4トレンチのSD6Aのように花崗岩の平石を積み上げていた。最大5石遺存している。この石積み遺構の西側は0.7mほど低くなっており、したがって、東側



第20図 第9・10トレンチ実測図

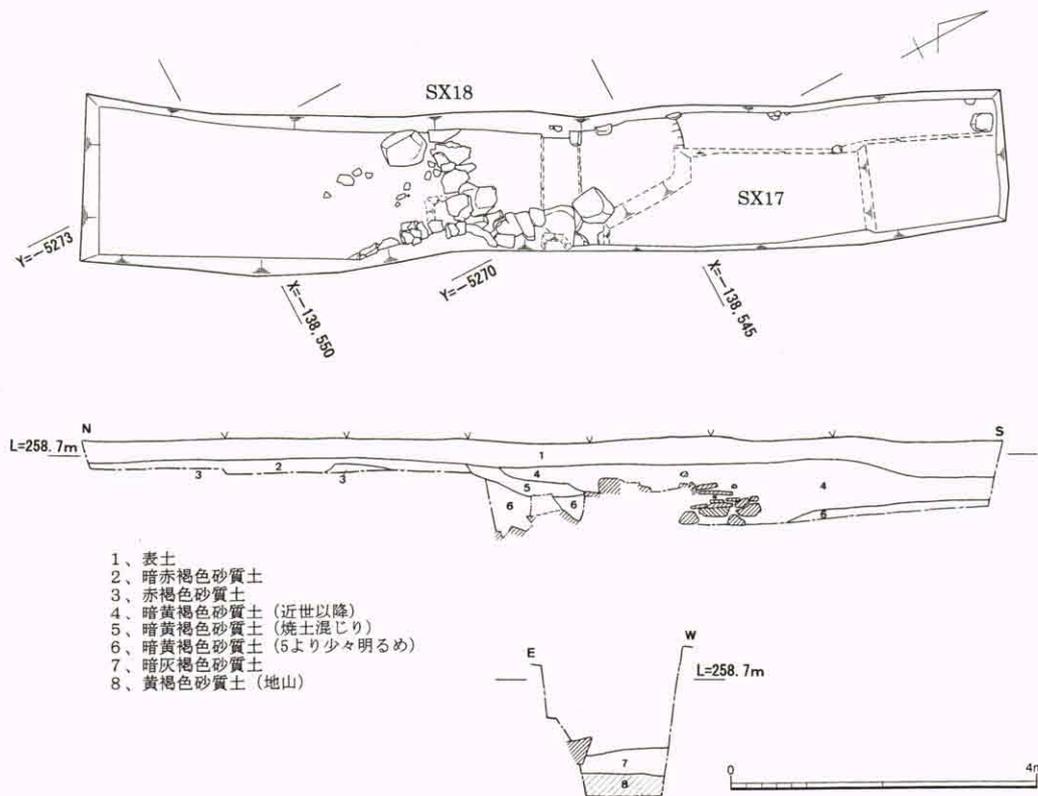
に土壇S X17が想定できる。石はないものの土壇は北側へ続く。北側は地山とよく似た赤褐色土である。土壇S X17に伴う石積み遺構に直交する石積み遺構S X18を確認した。東端は土壇S X17で、そこから西へ2 m続く。石積みはやや乱れており、同時期ではないかもしれない。暗黄褐色砂質土から瓦、土師器皿、常滑甕、宝篋印塔片などが出土した。

4. 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は整理箱で23箱である。破片がほとんどであるが、多岐にわたる。土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、常滑、信楽、古瀬戸、瓦、唐津、砥石、石鍋、タタキ石、銭貨、青銅製品、鉄製品、壁土、中国製青磁、中国製白磁、中国製青白磁、中国製褐釉、高麗青磁などが出土した。

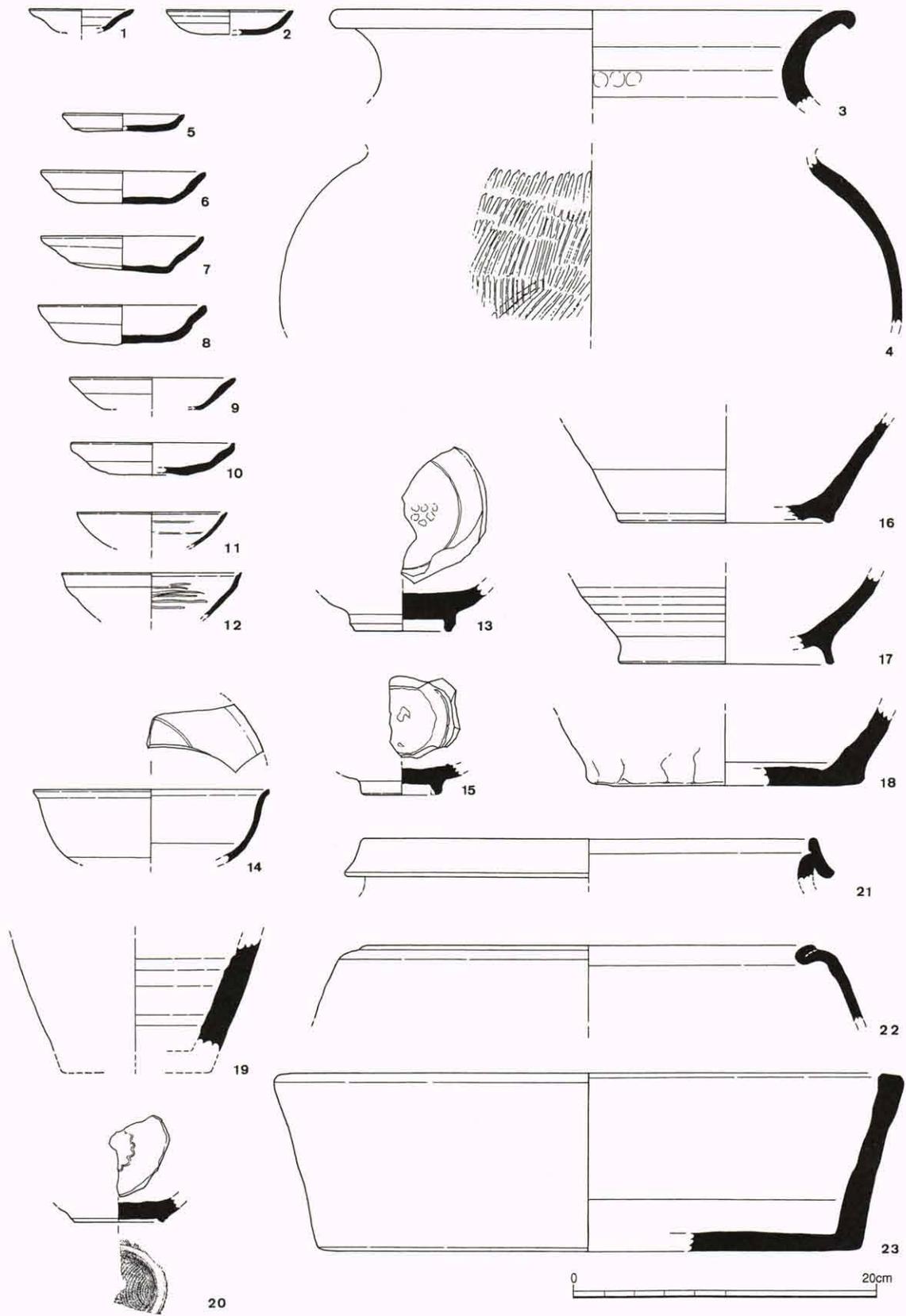
1・2は、第1トレンチのピットSP4から出土した。1は土師器皿である。口縁部をヨコナデ調整し、体部下半は摩滅のため不明瞭である。色調は淡乳褐色で、底部が破損しているが、おそらく、へそ皿である。口径6.8cmで、15世紀後半のものである。2は土師器皿である。口径8.2cm、器高1.2cmである。てづくね成形で、色調は茶褐色の16世紀前半の皿である。

3・4は、第2トレンチの表土から約30cm下の暗黄褐色砂質土層から出土した。3は須恵器甕の口縁部である。色調は青灰色で、内外面ともナデ調整を施す。4は須恵器甕の体部上半である。外面は斜め方向に叩き目を施す。内面は円形の板を当てている。3・4は同一製品と考えられる。



第21図 第10トレンチ実測図

5～32は、第4トレンチから出土した。5～10は土師器皿である。5は土師器の小皿である。室町～戦国時代に堆積した、溝SD5Aを覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。色調は灰白色であり、白土器系統である。口径は7.9cm、器高は1.2cmである。口径に対して底径の占める割合が大きく、13世紀のものと考えられる。6～10は中皿である。6・7は白土器系統である。6は口径10.8cm、器高2.1cmである。土師器皿分類^(注4)の洛外産Gタイプ模倣と考えられる。14世紀前半である。8～10は赤土器系統である。口縁部は面取り手法が退化しているが、洛外産Jタイプ模倣と考えられる。13～14世紀前半である。10は溝SD5Aを覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。他の中皿は北西部の焼土層から出土した。11・12は大和型瓦器椀である。11は北西部の焼土層から出土した。口径9.9cmである。体部内面には粗い暗文を施す。12は溝SD5Aを覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。口径は12cmで内面に暗文を施す。13は中国龍泉窯青磁椀である。溝SD5Aを覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。底径6.5cmで、見込みに花文の浮き彫りを施す。体部内外面とも施釉しているが、底部外面は露胎である。釉色は緑灰色で、素地は黄色や淡朱色に変色している。14は中国龍泉窯青磁椀である。溝SD5Aを覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。口縁部は小さく外反する。口径は16.8cmである。体部内外面とも施釉しており、釉色は緑灰色である。15は中国龍泉窯青磁椀である。溝SD5Aを覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。見込みの外周には施釉されているが、他は露胎である。釉色は緑灰色である。16は須恵器鉢である。溝SD5Aを覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。色調は灰色で、底部はわずかに高台を形作っている。17は須恵器質の鉢である。土手状遺構SX6Aを覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。色調は黄灰色で、底部は貼り付け高台である。底径は14.1cmである。東海系と思われる。18は信楽甕の底部である。溝SD5Aや土手状遺構SX6Aを覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。内外面はナデ調整、底部外面は不調整である。色調は黄白色である。19は中国白磁壺の体部下半片である。溝SD5Aや土手状遺構SX6Aを覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。内外面ともロクロナデ調整である。外面に淡乳白色の釉を施す。20は古瀬戸灰釉皿である。溝SD5Aを覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。削りだし高台で、底部は糸切りである。見込みにはヘラにより花文を施す。釉は淡黄褐色である。ただし、表面は被熱して荒れている。21は常滑甕の口縁部である。溝SD5Aを覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。色調は茶褐色で、口径は30cmである。22は大和型の土師器羽釜である。土手状遺構SX6Aを覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。色調は淡黄褐色で、口径は29.4cmである。23は瓦器鉢である。北西部の焼土層上面から出土した。色調は淡黄褐色で、口径は41cm、器高は14cmである。外面は黒色で、底部は橙褐色である。24は壁土である。北東部より出土した。色調は赤褐色で、被熱している。一面のみ遺存していた。25は棒状青銅製品である。溝SD5Aを覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。長さ10.8cm、直径2mm以下の細い棒である。現形は弧状であるが、もともとの形は不明である。26は鉄釘である。北東部の暗黄褐色砂質土層から出土した。長さ4.2cm、頭頂部は0.8cmの方形である。27は瓦器風炉の口縁部である。北部の焼土面を覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。内外面とも黒色で、外面には文様が印刻されている。14～15世紀である。28は瓦器方形浅鉢の口縁部であるが、焼土面を覆

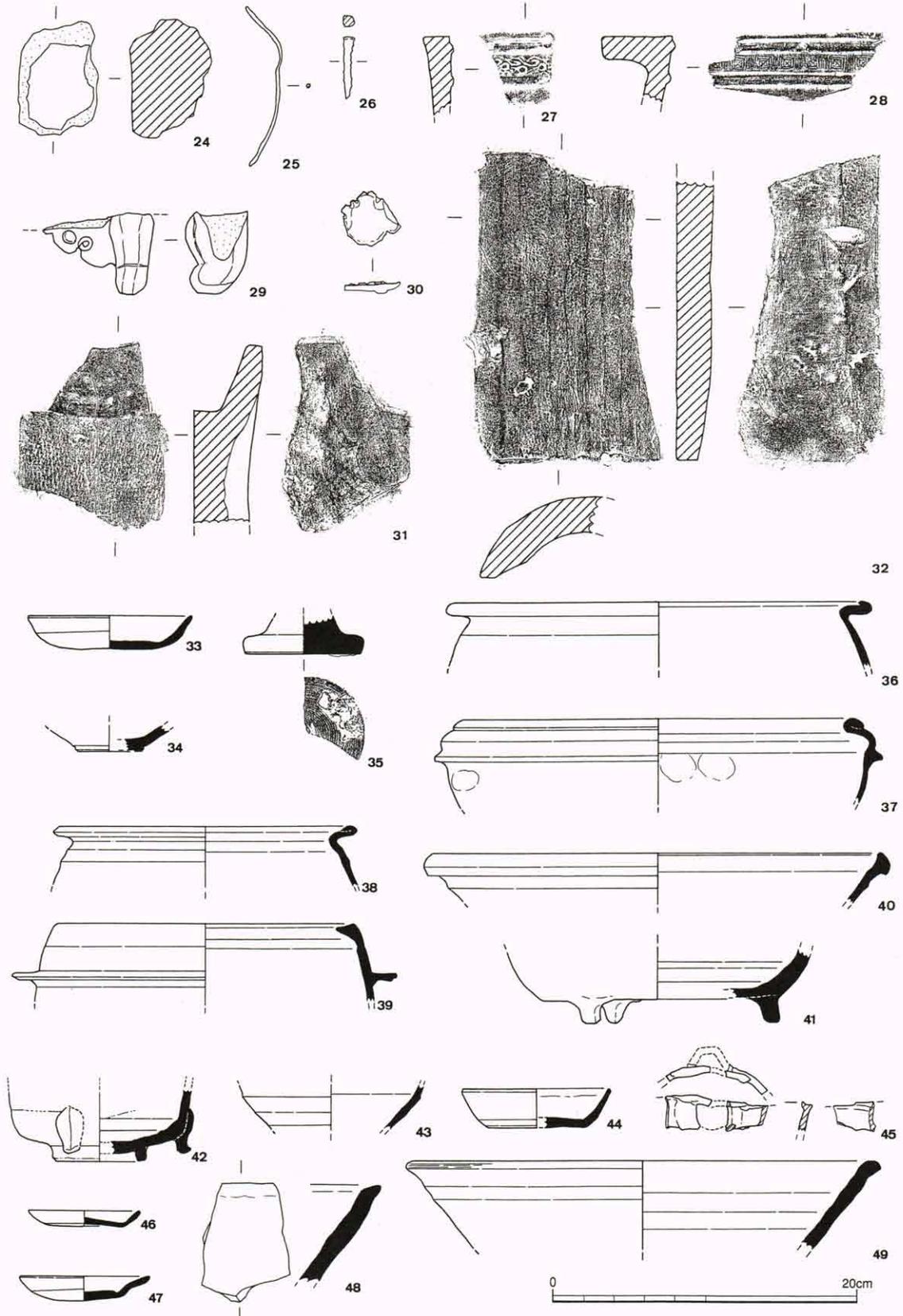


第22図 出土遺物実測図(1)

う暗黄褐色砂質土層から出土した。外面は黒色で、焼成はややあまい。口縁部外面は文様が印刻されている。15世紀のものである。29は瓦器浅鉢の脚部と考えられる。北西部の焼土層上面から出土した。色調は外面が黒色で、内面は淡褐色である。外形はヘラにより造形されている。ヘラにより貫通した孔が2つある。30は緑釉陶器である。北西部の焼土層上面から出土した。皿形で、外縁はヘラにより抉りを入れて造形している。内外面ともほぼ全面施釉されているが、内面中央は露胎である。釉色は淡緑色である。外面に小さな突起物がある。長さ3.7cm、幅3.5cm、厚さ0.6cm程度である。31は丸瓦である。溝SD5Aを覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。後部のみ遺存していた。外面は縄タタキを施す。色調は黒色である。32は丸瓦である。北東部より出土した。外面は縄タタキを施す。

33~41は、第5トレンチから出土した。33は土師器皿である。北部の焼土層上面(暗褐色土)から出土した。口径10.6cm、器高2.2cmである。34は古瀬戸椀である。中央部の暗黄褐色砂質土層から出土した。底部のみ遺存している。内面に施釉、外面は露胎である。釉色は淡緑色である。底径4.2cmである。35は古瀬戸仏花瓶である。東壁より出土した。外面は施釉されており、釉色は黒色である。底部は糸切である。36は大和型の土師器羽釜と考えられる。南部の暗黄褐色砂質土層から出土した。口縁部は「く」の字に屈曲している。口径27cmである。胎土は精良で、色調は黄褐色である。37は大和型の土師器羽釜である。南部の暗黄褐色砂質土層から出土した。口縁部は粘土紐を外側に折り返し玉縁状としている。鐶は小さく突出させたものである。胎土は精良で、色調は黄褐色で、外面下半はこげ茶色で、煮沸に使用したと考えられる。口径26cmである。38は土師器羽釜である。南部の暗黄褐色砂質土層から出土した。36と同様に口縁部は「く」の字に屈曲している。焼成は良で、色調は黄褐色である。口径は19.8cmである。39は土師器羽釜である。南部の暗黄褐色砂質土層から出土した。外形は鉄釜を模倣している。色調は黄褐色で、口径は18.6cmである。40は東播磨魚住産の須恵器鉢である。南部の暗黄褐色砂質土層から出土した。口縁部は黒変している。他は灰色である。内外面ともナデ調整を施す。41は瓦器浅鉢の底部である。南部の暗黄褐色砂質土層から出土した。三足が付くものである。胎土は良で、色調は濃い灰色である。

42~57は、第6トレンチから出土した。42は中国龍泉窯青磁香炉である。口縁部は欠損している。東斜面から崩落した暗黄褐色砂質土層から出土した。高台とともに三足が付くものである。高台径は5.4cm、残存高4.8cmである。釉色は淡褐色で、胎土は灰白色である。同型のもは、韓国新安沖で14世紀前半に沈没した船から出土している。43は高麗青磁椀である。口縁部も高台部も遺存していない。南西部の焼土層から出土した。胎土は精良で、内外面とも施釉されている。釉色は緑灰色で、断面は灰色である。接合はしないものの、同種のもが3点出土した。44は中国南部産の白磁皿である。焼土層を覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。内外面とも施釉されているが、口縁端部内面の5mm程度は釉をぬぐっており、いわゆる「口禿げの皿」である。口径9.6cm、器高2.6cmである。45は陶器鉢の片口部分である。南西部の焼土層から出土した。内外面とも施釉されている。断面は灰色で、釉色は淡緑色である。ヘラにより成形しており、片口の屈



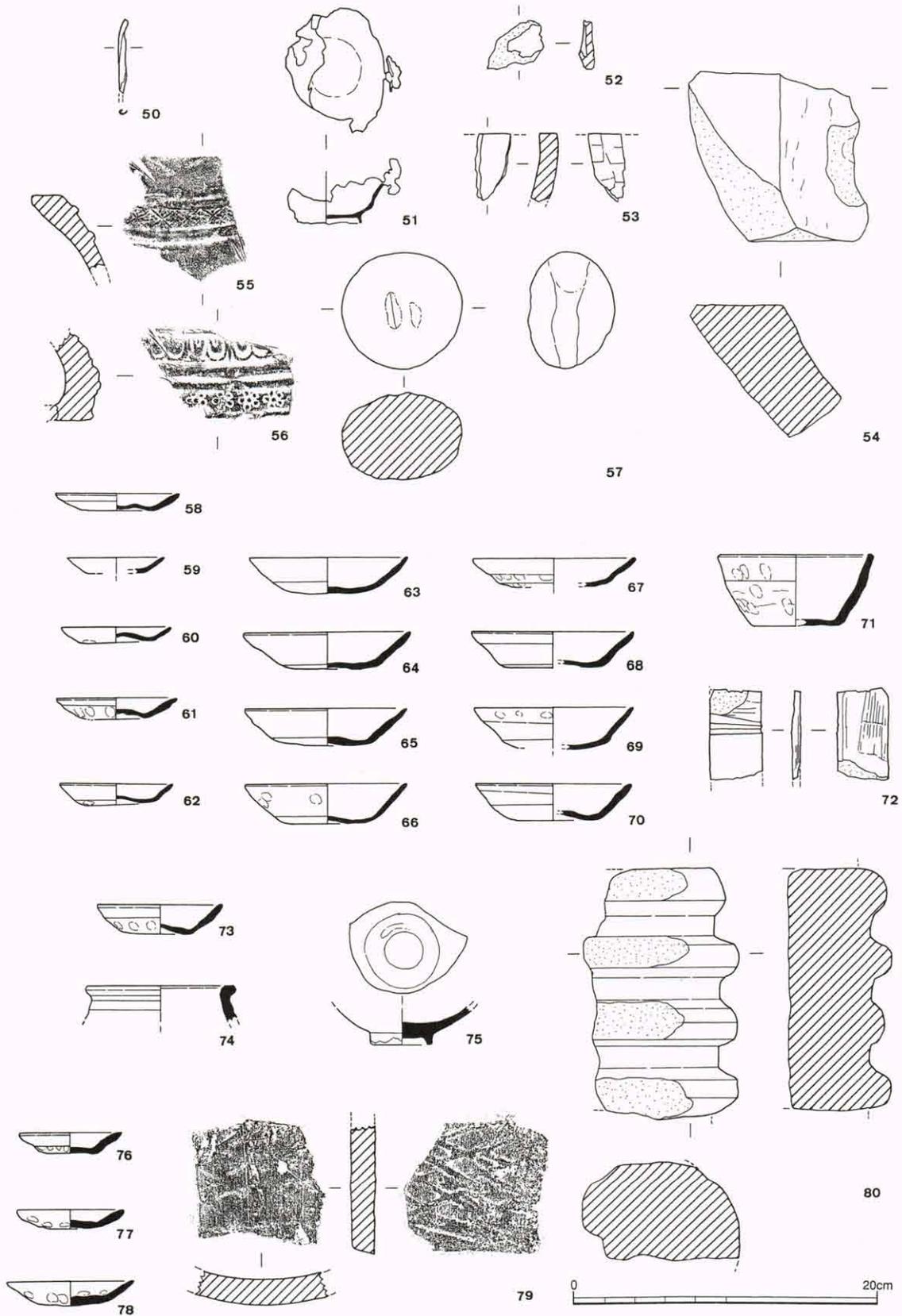
第23図 出土遺物実測図(2)

曲部が遺存している。接合はしないが、棒状の装飾をつけた破片と同一であろう。46は土師器小皿である。焼土層を覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。口径は7.8cm、器高1.1cmで、胎土は精良、色調は淡褐色である。口縁部はヨコナデ調整、他は不調整である。47は土師器小皿である。北部から出土した。口縁部は強くヨコナデ調整し、他は不調整である。色調は橙褐色で、いわゆる赤土器である。内面は中央部から「の」の字状になで上げている。48は信楽鉢である。暗黄褐色砂質土層から出土した。口縁部を尖らせたものである。内面は使用により摩滅している。色調は外面が橙褐色、内面が黄白色である。49は信楽鉢である。南部の暗黄褐色砂質土層から出土した。口径30cmである。外面は淡い橙褐色で、内面は黄白色である。50は棒状青銅製品である。北西部の焼土層を覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。現存長4.9cm、厚さ0.3cmで、断面は「C」の字状である。51は青銅製椀である。南東部の焼土を覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。色調は緑灰色で、底径4.2cm、現存高7.5cmである。口縁部端に付属品が付いているが、本体とともに焼け歪んでいる。仏教密具の六器であろう。52は滑石製石鍋である。南端の焼土層から出土した。内面は黒灰色で、外面は灰白色や黒灰色である。ほとんど欠損しており、内面の一部が遺存しているのみである。53は滑石製石鍋である。北西部の焼土層から出土した。口縁部のみ遺存している。外面は成形時の削り痕が顕著である。内面は平滑である。色調は銀色である。52・53は長崎産と思われる。54は砥石である。南部の焼土層を覆う暗黄褐色砂質土層から出土した。S X 11直上である。砥面は1面である。別の1面は自然面が遺存しているが、他の面は破損している。石質は砂岩である。55は瓦器浅鉢である。北西隅の壁で出土した。口縁部上面は平滑で、外面には文様を印刻している。色調は黒色である。56は瓦器風炉の下部である。北部の暗黄褐色砂質土層から出土した。外面には印刻を二段に施している。上半分は蓮華文、下半分は5弁の花文である。色調は黒色である。57は花崗岩製のタタキ石である。卵形で、長さ7.9cm、幅7.8cmで、厚さ5.5cmである。平面には2条の浅い溝がある。これは叩き痕である。弥生時代もしくはそれ以前であろう。

58～72は、第7トレンチから出土した。58は土師器皿である。北部の暗黄褐色砂質土層から出土した。胎土は精良で、色調は茶褐色である。口径は8.0cm、器高は1.2cmである。16世紀のものである。59は土師器皿である。土壇S X 14で出土した。胎土は良で、色調は淡褐色である。口径は6.2cm、器高は1.1cmである。口縁部は強くヨコナデ調整を施し、他は不調整である。60は土師器皿である。土壇S X 14で出土した。底面の中央は少し盛り上がり、いわゆるへそ皿である。胎土は良で、色調は淡褐色である。口径は7.1cm、器高は1.1cmである。61は土師器皿である。土壇S X 14で出土した。胎土は精良で、色調は赤褐色である。いわゆる赤土器のへそ皿である。口径は7.9cm、器高は1.4cmである。62は土師器皿である。土壇S X 14で出土した。胎土は良で、色調は淡褐色である。口径は8.9cm、器



第24図 第6トレンチ出土青銅製椀



第25図 出土遺物実測図 (3)

高は1.5cmである。63は土師器皿である。土壇S X14で出土した。胎土は良で、色調は乳褐色である。口縁部はヨコナデ調整し、内面はナデ調整、他は不調整である。口径は10.4cm、器高は2.5cmである。いわゆる白土器である。洛外産土師器皿Gタイプの模倣型である。64は土師器皿である。土壇S X14で出土した。胎土は良で、色調は乳褐色である。口縁部はヨコナデ調整し、内面はナデ調整、体部下半がユビオサエ後ナデ調整、他は不調整である。口径は10.9cm、器高は2.4cmである。洛外産土師器皿Gタイプの模倣型である。65・66も同様である。67は土師器皿である。土壇S X14で出土した。口縁部は強くヨコナデ調整し、外反させる。口縁端部は面取り手法であるが、退化しており、断面は丸みを持っている。胎土は良で、色調は淡褐色である。口径は10.7cm、器高は2.0cmである。器壁は薄く、14世紀後半の土器の特徴を有している。68～70は63などと同様に洛外産土師器皿Gタイプの模倣型である。71は土師器鉢である。南部の暗黄褐色砂質土層から出土した。胎土は精良で、色調は淡黄褐色である。内面はナデ調整を施し、外面はユビオサエの後、ナデ調整を施している。粘土紐痕がある。口径は9.7cm、器高は4.8cmである。72は粘板岩製の砥石である。土壇S X14の西斜面より出土した。色調は黄土色である。上下が欠損しているが、縦5.8cm、横3.4cm、厚さ0.7cmである。

73～75は、第9トレンチから出土した。73は土師器皿である。北斜面から谷部平坦面に移る地点で出土した。上方から崩落してきたらしい。口縁部はヨコナデ調整し、外面下半はユビオサエ、内面はナデ調整である。胎土は良で、色調は赤褐色である。内面は底面から外方向へ「の」の字状にナデ上げている。口径は8.2cm、器高は1.9cmである。14世紀前半と考えられる。74は中国褐釉壺である。トレンチ中央部の暗黄褐色砂質土層から出土した。口縁部は台形で、角は丸く仕上げている。内外面ともロクロナデである。胎土は精良で、外面は施釉され、釉色は鉛色である。他は茶褐色である。口径は7.6cm、残存高は2.2cmである。75は中国青磁碗である。内外面はロクロナデで施し、削りだし高台である。内面は施釉後、蛇の目状に釉をぬぐっている。胎土は精良で、色調は緑灰色である。底径は4cmで、残存高は2.3cmである。

76～79は、第8トレンチから出土した。76は土師器皿である。土壘状遺構の上方で深さを知るために、一部掘削した部分の西壁から出土した。口縁部は尖り気味で、断面が三角形である。胎土は良で、色調は茶褐色である。口径は6.6cm、器高は1.4cmである。花崗岩の岩盤の上に土を盛り、土壘とした際に、埋没した遺物である。プロポーシオンから15世紀のものと考えられる。77は土師器皿である。76と同地点で出土した、同型のもので、口径は6.8cm、器高は1.3cmである。胎土は良で、色調は茶褐色である。78は土師器皿である。76・77と同地点で出土した。胎土は良であるが、火山灰が含まれているような柔らかい感じがするものである。口径は8.4cm、器高は1.7cmである。口径に対し底径が小さく、また、口縁部も尖り気味である。76～78は15～16世紀前半のものと考えられる。79は平瓦である。暗黄褐色砂質土層から出土した。外面は格子目タタキを施し、内面は布目である。

80は第10トレンチから出土した。宝篋印塔の上部である。花崗岩製で、残存高16.3cm、円形の断面径は10.2cmである。

5. 遺構の変遷

今回の発掘調査は、元弘の乱までの遺構を確認する目的で実施したので、それ以前の遺構は掘削していない。

また、元弘の乱に伴う焼土層や、その段階に建っていた建物跡についても、有無を確認したのみで、完掘はしていない。このような制約の中で、3時期の遺構の存在を確認することができた。第1期は鎌倉時代末期、元弘の乱で廃絶した遺構群である。第2期は南北朝期から室町時代で、廃絶した第1期の遺構群の上に溝や土壇などを復興した段階である。第3期は戦国時代で、城として使用した段階である。

それでは、それぞれの時期の遺構および遺物の様相について列記したい。まず、第1期に伴う遺構について説明する。第1トレンチでは、岩盤を削って作った堀SD2を確認した。今回の調査地内で、東から続く堀の北肩は、まっすぐ西へ続くものの、南肩は大きく南に屈曲し、最大幅7.2mとなることが判明した。この堀は西にある現状の堀に続くらしい。ただし、前回の調査では現代層によって大きく攪乱されており、明瞭な南肩は検出されなかった。北肩の北側に土塁があったかどうかは不明である。現在、この地は東海自然歩道となっており、往時の姿が確認できなかった。現状で確認される堀跡は南から延びた丘陵が二股に分かれる地点にあり、東西に丘陵を分断しており、全長は100m以上に及ぶ。この第1トレンチより南方には土塁あるいは堀はなく、この地点が笠置寺の南端の防御線と考えられる。奈良大学の千田嘉博先生によれば、ここに、防御線を設定することは、通常考えられないという。それは、攻め手側が丘陵の高い方となるからである。なぜ、ここに設定したのかというと、守るべき寺の施設が北側の谷部にあったからではないか、と解釈されている。

第3～6トレンチは、谷部の調査である。ここで、認められたのは、焼土に覆われた石列である。これは建物の土壇の端を堅固にする施設と考えられる。第3トレンチでは、土壇SX7を検出した。第4トレンチでは平坦面SX8と石畳状遺構、第5トレンチでは土壇SX10、第6トレンチでは第5トレンチから続く、SX10の北端石列を検出した。これらの土壇には少なくとも1棟の建物が建っていたと考えられる。また、多数の土師器皿、瓦器椀などが壁土と思われる焼土塊とともに埋没していた。遺物の年代は鎌倉時代後期であり、まさしく元弘の乱に伴う火災の時期に相当する。出土遺物は豊富で、中型の土師器皿は口径11cmほどのいわゆる赤土器と白土器である。瓦器椀は高台がほとんど退化したものと、まったく粘土紐による高台がないものの2種がある。常滑甕・壺、東播磨魚住産の鉢や甕、瓦器椀・火鉢・香炉銅製椀、鉄滓、鉄釘、石鍋などのほか、中国龍泉窯青磁椀・香炉、中国南部産白磁壺・皿、褐釉壺、青白磁小壺、高麗青磁椀という、東アジアとの貿易によってもたらされた製品が多い。

第2期に伴う遺構は第3トレンチから第7トレンチまで認められた。特に、第3・4トレンチでは谷の東斜面の下端で、30mの長さに亘って石組み溝SD5A～Dが設けられていたことがわかった。溝の内法は0.7mである。その西隣に幅1mほどの土手状遺構SX6Aがあった。これは、通路の可能性はある。この遺構は第3トレンチで東に屈折している(SX6B)。南側には土

壇があり、北側の敷地と土手状遺構で分けていた可能性がある。第6トレンチでも谷の東斜面の下端で溝が設けられていた。ここでは、花崗岩の大岩があったため、水を通すため岩を削って幅50cmの溝S D11を設けていた。この事実は、笠置山に優秀な石工集団が存在していたことを証明している。この溝の西側でも土手状遺構S X12が認められた。断面を断ち割った結果、焼土層の上に土手状遺構を作っていることが判明した。また、第5トレンチまで続く南北の石列(土壇S X10東石列)を確認したが、これも、第1期に伴う東西方向の石列の上に作られていた。第5トレンチの南部では2.2mごとに石が置かれていた。建物の礎石(S B 9)と考えられる。出土遺物は、土師器皿・土釜、信楽甕・鉢、古瀬戸鉢・おろし皿、瓦器火鉢、龍泉窯青磁椀などがある。

これらの施設について同志社大学の鋤柄俊夫先生は、中世の笠置寺が丘陵部のみならず、谷部も5段に及ぶ平坦面を造成した、本格的な山岳寺院であったことが判明した点を重視された。すなわち、中世山岳寺院を考える上で、貴重な資料となったと評価された。

第3期に伴う遺構は、第1トレンチの堀S D 1 A・Bのほか、北側で柱穴を2基確認した。堀は途切れており、ここに土橋があったことが判明した。千田先生によれば、現状で確認される堀の東端は、丘陵端と同一地点であり、丘陵の下方には延びていないことから、戦国時代でも古い様相が窺われるという。出土遺物は土師器皿、龍泉窯青磁椀などがある。

6. まとめ

今回の調査により、鎌倉時代末期には谷部に土壇を設け、建物を建てていたことが判明した。そこでは、日本製の日常使う土器・陶磁器のほか、中国製陶磁器をはじめ、高麗青磁、銅製椀などがあり、香炉や火鉢、銅製椀は仏教の行事に使う六器という構成から、建物が僧坊であったといえよう。すなわち、中世前期の山岳寺院を考える上で重要な資料が提示されたことになる。また、1トレンチの堀の存在は、太平記に「岩を切って堀とし」と記されたとおりであり、文献資料を考古資料が検証した例となった。

(伊野近富)

注1 中井均「笠置城」(『城』第113号) 関西城郭研究会 1982

注2 『史跡及び名勝笠置山保存管理計画策定報告書』 笠置町教育委員会 1975

注3 伊野近富「史跡名勝笠置山」(『京都府遺跡調査概報』第119冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006

注4 伊野近富「土師器皿」(『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会) 1995

参考文献

小林義亮『笠置寺激動の1300年』 文芸社 2002

圖 版



(1) 調査地遠景(南東から)



(2) 調査地近景(北から)



(3) 第3～6トレンチ全景
(北から)



(1) 第 1 トレンチ重機掘削状況(北から)



(2) 第 1 トレンチ全景(南から)



(3) 第 1 トレンチ SD 1 A・SD 1 B 検出状況(北から)



(4) 第 1 トレンチ SD 1 A 検出状況(北東から)



(5) 第 1 トレンチ SD 2 検出状況(北西から)



(6) 第 1 トレンチ SD 2 土層断面(南から)



(7) 第 1 トレンチ SD 2 南端土層断面(北東から)



(8) 第 2 トレンチ全景(南西から)



(1) 調査前風景(南から)



(2) 第3トレンチ全景(北から)



(3) 第4トレンチ全景(南から)



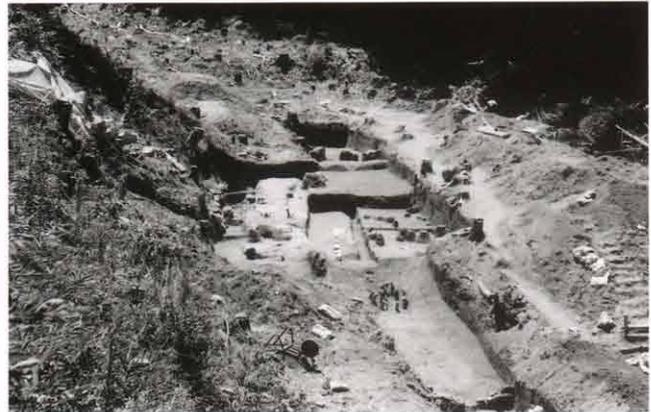
(1) 第3-2トレンチSD5B検出状況(西から)



(2) 第3-3トレンチSD5C検出状況(西から)



(3) 第3-4トレンチ全景・五輪塔空風輪検出状況(東から)



(4) 第3-4トレンチ全景(北から)



(5) 第4トレンチSD5A・SX6A全景(南から)



(6) 第4トレンチSD5A土層断面(北から)



(7) 第4トレンチ北西部遺物出土状況(東から)



(8) 第4トレンチSX6A土層断面(北西から)



(1) 第 5 トレンチ S B 9 ・ S X 10
焼土面検出状況(北から)



(2) 第 5 トレンチ S B 9 検出状況
(東から)



(3) 第 5 ・ 6 トレンチ南半部全景
(北から)



(1) 第 6 トレンチ北半部全景
(南から)



(2) 第 6 トレンチ S X10・S X12
検出状況(東から)



(3) 第 6 トレンチ S X10・S D11・
S X19 検出状況(南西から)



(1) 第6トレンチ南西部土層断面
(東から)



(2) 第6トレンチ調査風景
(南西から)



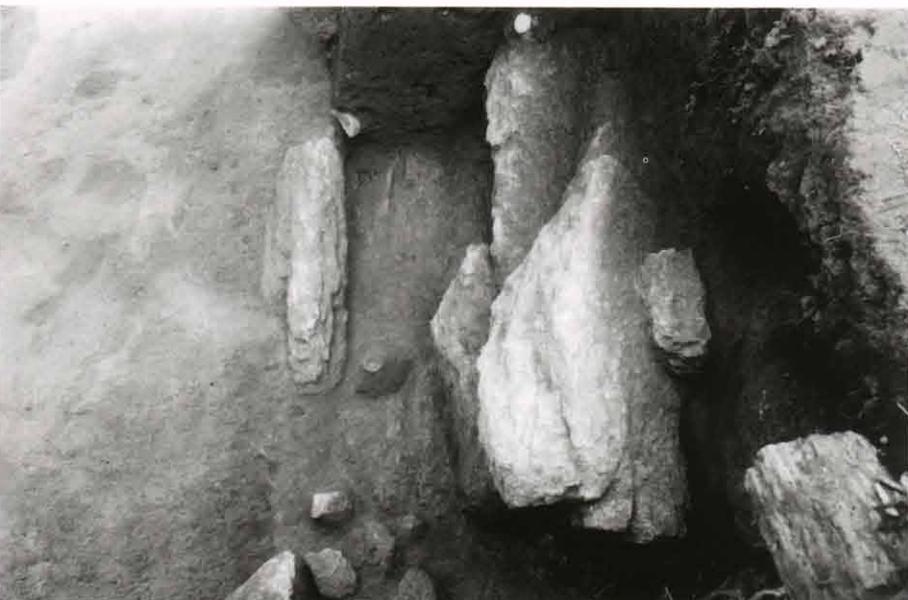
(3) 第6トレンチ北壁土層断面
(南西から)



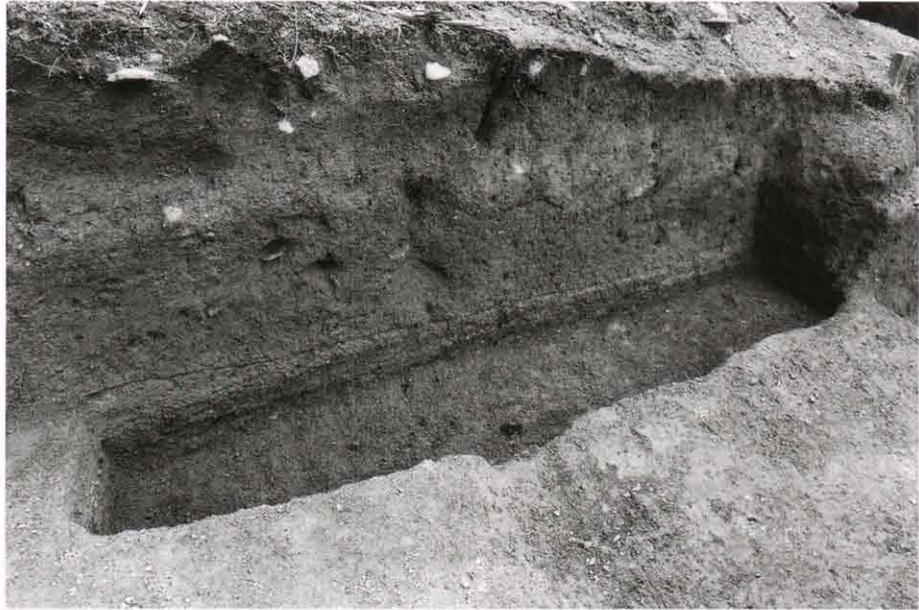
(1) 第6トレンチS D11・S X19
検出状況(西から)



(2) 第6トレンチS D11検出状況
(西から)



(3) 第6トレンチS D11検出状況
(南から)



(1) 第6トレンチ南壁焼土層断面
(北から)



(2) 第5・6トレンチS X10検出
状況(西から)



(3) 第7トレンチ全景(南から)



(1) 第7トレンチ南端部遺物出土
状況(北から)



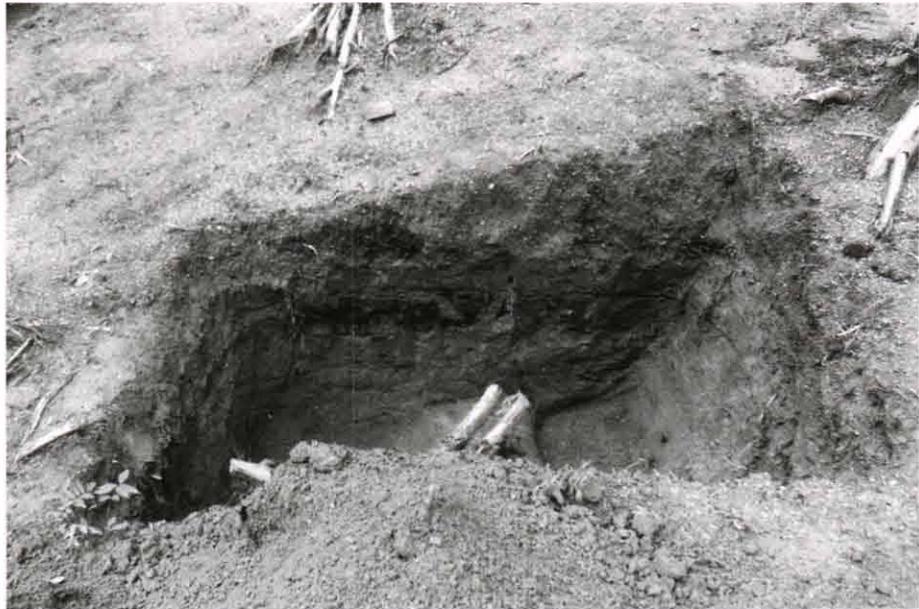
(2) 第8トレンチ岩盤・空堀検出
状況(西から)



(3) 第8トレンチ岩盤・空堀検出
状況(東から)



(1) 第8トレンチ岩盤検出状況
(西から)



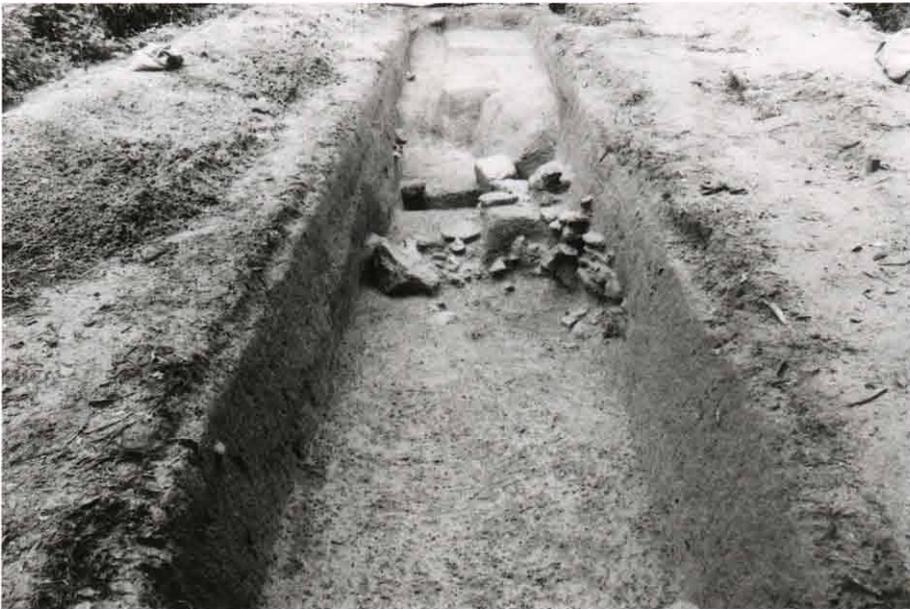
(2) 第8-2トレンチ全景
(西から)



(3) 第8-3トレンチ全景
(北東から)



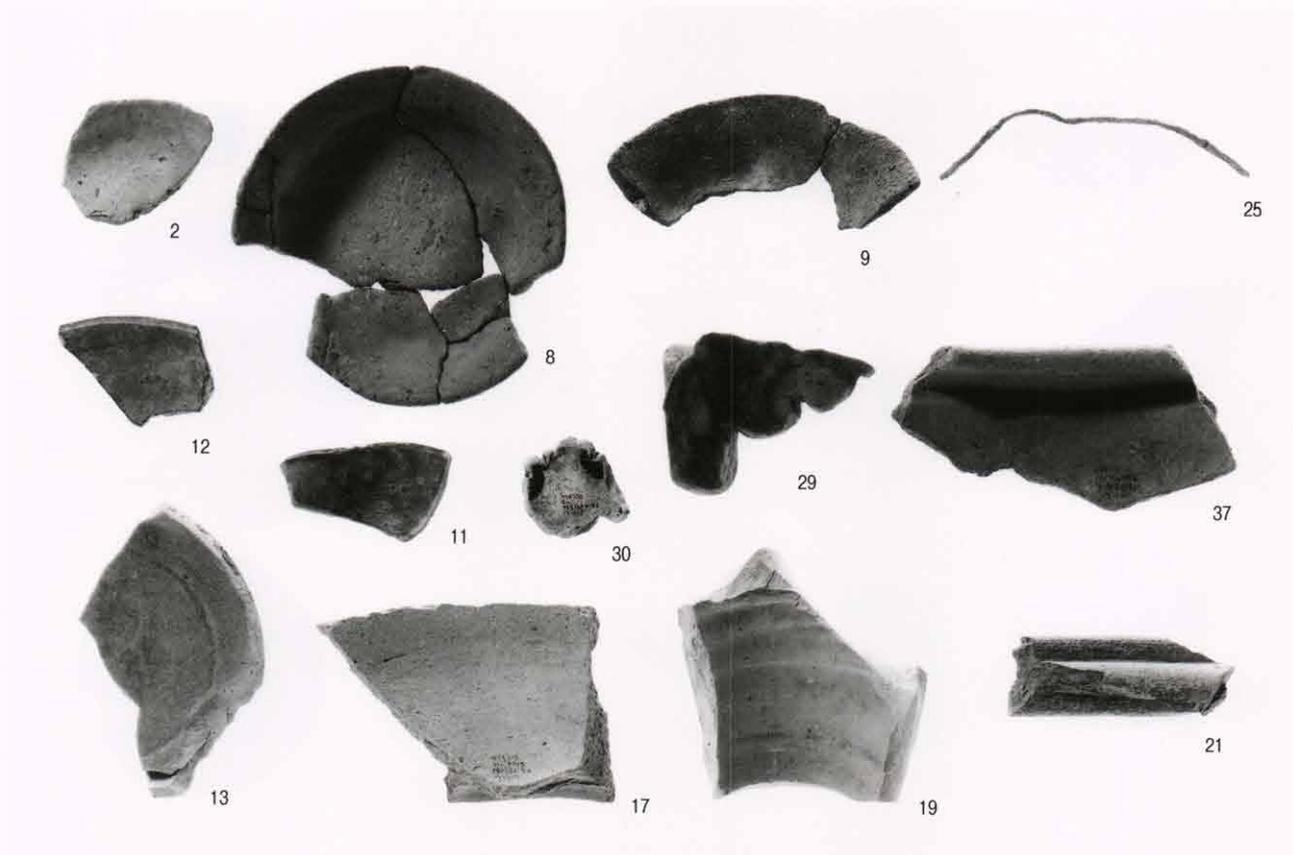
(1) 第9トレンチ全景(南から)



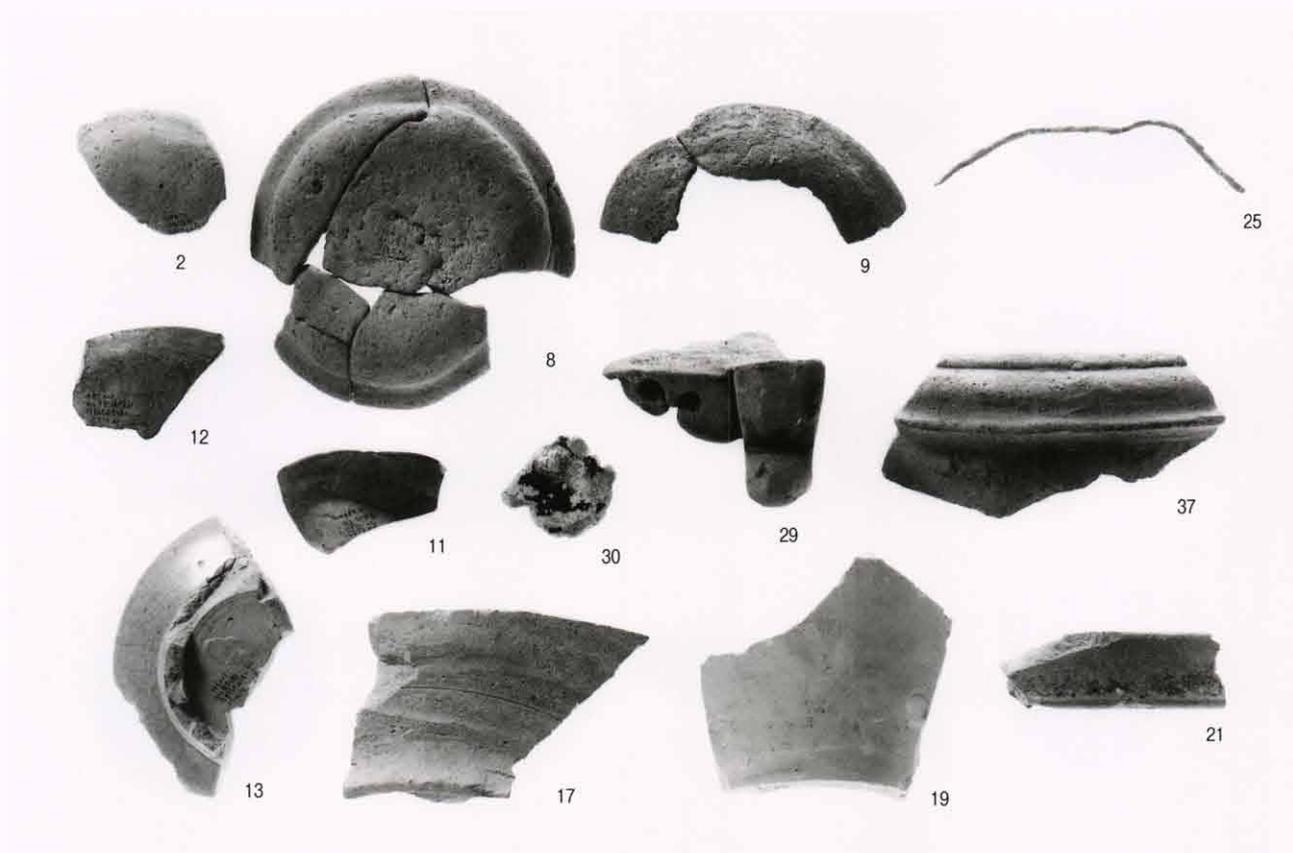
(2) 第10トレンチ全景(南から)



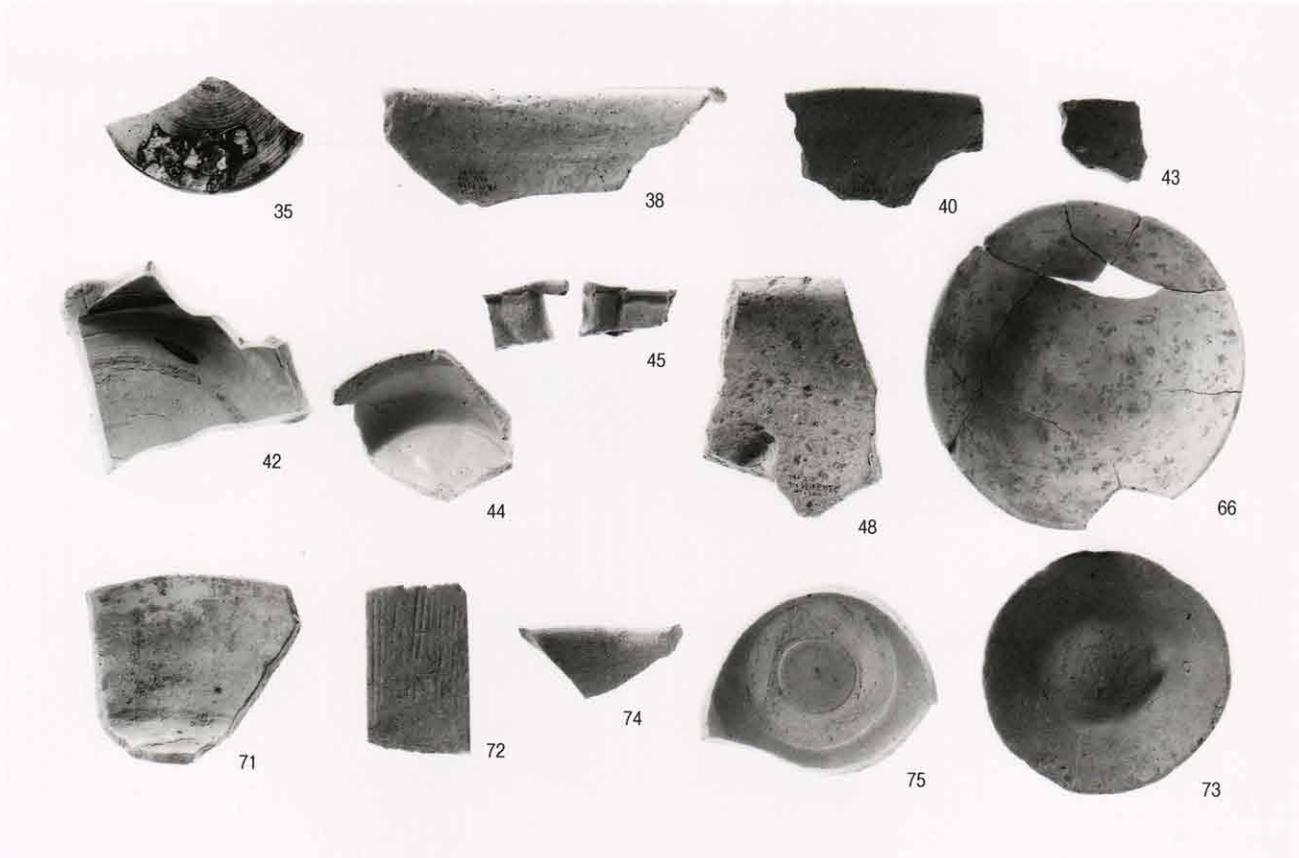
(3) 第10トレンチS X18検出状況
(南西から)



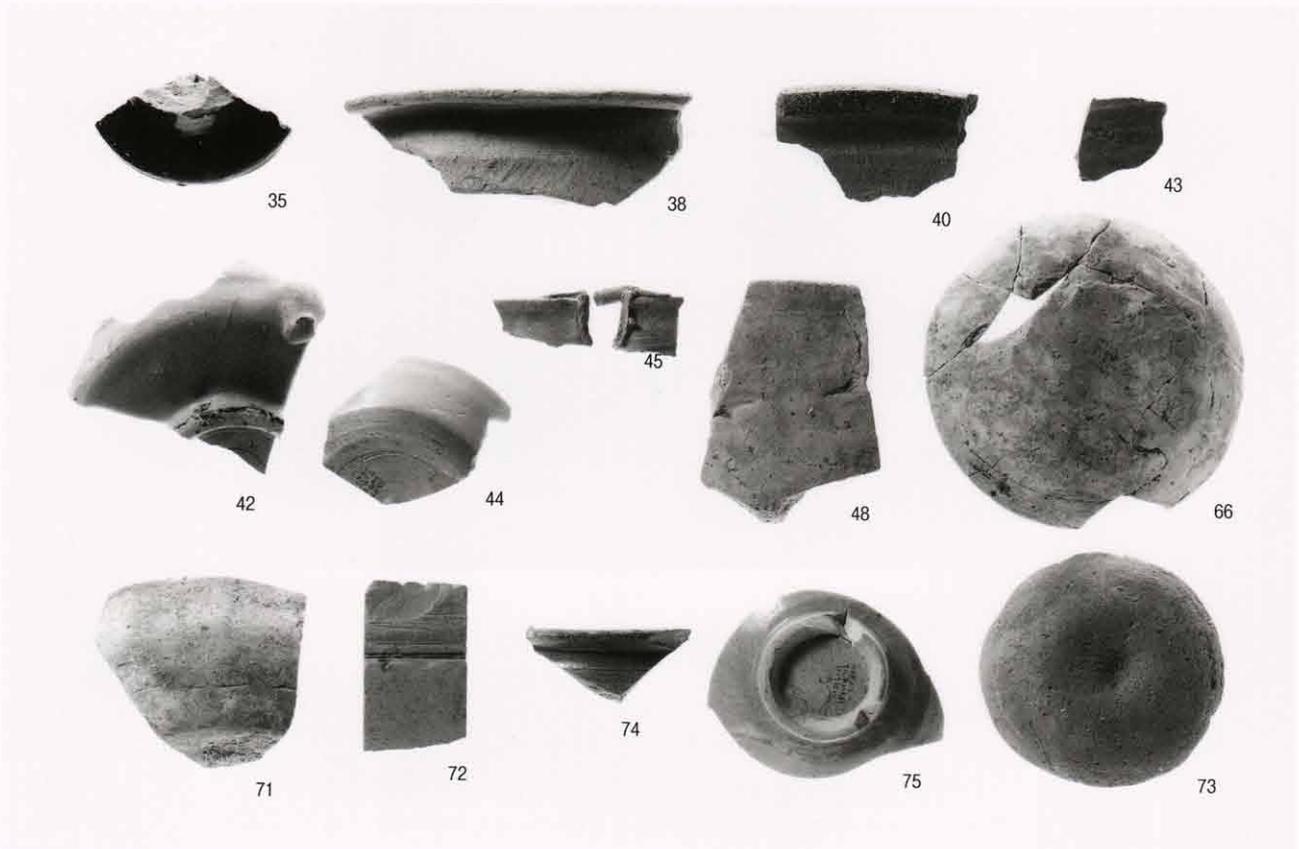
(1) 出土遺物(内面)



(2) 出土遺物(外面)



(1) 出土遺物(内面)



(2) 出土遺物(外面)